



94号 350円

頌 春

女から女たちから女へそして女たちへ 25

十歳となった△あこら東海▽ 浅野美和子 3

△あこら東海▽で出会った仲間たち 7

東 海 か ら

山下智恵子 森田淳子 岡部栄美香 斉藤菊代

長縄幸子 中野節子 立木侑代 合田京子 伊藤汎美

山中洋子 長谷川友子 加藤登紀子 山田和枝

女性運動と行政

「日本女性会議'84なこや」不参加の立場から 水田珠枝 20

「均等法」成立は五月? 41

家庭科必修に灰色答申 41

'84イブに走ったリブたち 41

あこらのあこら 43

各地の〈あごら〉へどうぞ (カッコ内は
例会日と会場)

- ☐ あごら旭川 (第3土曜・13時30分—16時)
・北海道 上川郡東川町西5号南3 小坂啓子
・ ☎ 0166=82=2598 ☎ 071-14

- ☐ あごら札幌 (毎月13日喫茶「ミドリ」)
・札幌市西区琴似1条6丁目 グランドハイッ琴似
408号 細田英理子
・ ☎ 011=644=2927 〒063

- ☐ あごら仙台 (時間、会場とも流動的)
・仙台市高松1—10—65—102 渡辺早苗
・ ☎ 022=71=0274 〒983

- ☐ あごら柏 (時間、会場とも流動的)
・千葉県印旛郡白井町大山口1-7-20 桑原ちえ子
・ ☎ 0474=91=4843 〒270-14

- ☐ あごら新宿 (時間、会場とも流動的)
・新宿区新宿1-9-6 斉藤千代
・ ☎ 03=354=3941 (BOC) 〒160

- ☐ あごら武蔵野 (第4土曜・19時
かわら版事務所)
・小平市小川町1-763-86 丹羽雅代
・ ☎ 0423=43=6749 〒187

- ☐ あごら京王 (第2水曜14時—16時
福井宅または調布婦人会館)
・調布市仙川町3-12-32 福井浅子
・ ☎ 03=308=7871 〒182

- ☐ あごら湘南 (時間、会場ともに流動的)
・平塚市公所478 小川まり子
・ ☎ 0463=58=6707 〒564

- ☐ あごら東海 (第4木曜・10時—12時半)
・愛知県愛知郡東郷町白鳥4-5-1
押草団地113—305 石川方 加藤登紀子
・ ☎ 05613=9=2308 〒470-01

- ☐ あごら京都 (第2日曜・11時—16時)
・京都市左京区一乗寺築田町56-1 塚崎美和子
・ ☎ 075=791=4623 〒606

- ☐ あごら大阪 (第3日曜・11時30分—15時)
・吹田市岸部中1—29—4 藤井里子
・ ☎ 06—387—6574 〒564

- ☐ あごら山口準備中 (第1日曜・11時—17時
森川宅)
・下関市長府黒門東町1—15 森川万智子
・ ☎ 0832=46=3181 〒752

- ☐ あごら九州 (第2土曜・14時30分、第4土曜
・18時30分、福岡市立婦人会館)
・福岡市中央区笹丘2-4-6 小島サカエ
・ ☎ 092=521=7624 〒810

- ☐ あごら佐世保 (第2・4金曜10時30分—
12時、佐世保市立図書館)
・佐世保市瀬戸越町1415-25 内田佳崇
・ ☎ 0956=49=8591 〒857-01

〈あごら〉の
仲間と
ナイロビに
行こうよ！

ナイロビのNGOフォーラムの申し込みは十二月にすませましたが、NGOからは、日本の申し込みが五百人もあり、ベッド数不足のナイロビゆえ調整してほしいという内示があったようです。あごらVはメキシコ、コペンの実績もあり、今回も分科会を持つよう申し込んであります。恐らく大きな人員削減の要請はないものと思われませんが、このような事情もありますので、参加ご希望の方は、専門分野・活動歴などをお書きのうえ、至急お申し込みください。

十歳となった／＼あごろ東海

浅野美和子

自己紹介が続いている。細長い机を囲んで三十人、覚えのないほど久しぶりの顔もあれば、東京から駆けつけた懐かしい顔もある。――あの頃もこうだった。記憶のページをめくると、／＼あごろ東海V初めのころ、いつも自己紹介をやっていた。月毎に新しい顔がふえ、自己紹介が必要となる。個性も境遇もそれぞれ違うのに、皆「主婦性」という共通項を負っていた。夫や姑との関係、子どもの問題、夫の会社や近所とのかかわりに身動きのならぬ毎日の中で、どうやって自分を保ち、自分らしく生きていけるのか――、涙と溜息、笑いと気焔。そんな雰囲気の中で、いつしかお互いの肌の温もりを確かめながら、「主婦とは何か」「どう自立するか」というテーマが展開していった。――あれはCRをやっていたんだ、今になってそう思う。

自己紹介はまだ続いている。テーブルの上のしゃぶしゃぶが食べごろの湯気を立て始める。あの頃と違う点がある。それはみんなが「主婦」以上の何ものかになったということである。経験の交流と学習、という立派に聞こえるが、実をいうとかなりいいかげんだった。時も所も一定せず、誰かがこの指止まれと呼びかけると、その時出たい人出られる人がメダカの群のように寄り集まり、組織も原則も作らず、心のもえるままにいろいろなことをした。自己紹介を卒業すると、各自の問題、関心、勉強していることをお互いに講師になって仲間へ伝える。時には専門家の講演を聴く。イベントに参加する。『あごろ本誌と『ミニ』の編集や合評会。このような営みのなかで、仕事を持った人、ライフワークを追究する人など、それぞれ「主婦」の枠を数歩踏み出し歩き出したのだった。誰かが何かを始めるに当たっては、仲間が手伝ったり相談に乗ったりしたことも忘れがたい。歩き出して何年めかの会員の近況を返信はがきから御紹介する。

◇水泳の特訓にだけはついていております。四年前はかなづちでしたが、今年は泳ぎをものにしようとして毎日練習しても、年が年ですから思うほどの伸びはありません。それでも指導員の資格を取ろうというのですから、我れながらあきれております。

◇『主婦が歩きだすとき』（高橋ますみ著）を「いま、や々と朝」という題名で脚本化しましたが、上演してく

庵 とき子

れる劇団がなく残念です。続いて『鸚鵡籠中記』という本の中から、江戸時代の名古屋を舞台にした女の問題を扱った戯曲を執筆中。

千田 靖子

◇シュタイナーを勉強すればするほど大変なことを始めたという思いです。自我を強めることで既成概念や既存の体制に捉われないで判断できる自由な精神を目標とします。したがって教師の人間そのものが、真に自由な精神をもつべく勉強しています。

中島 宏子

◇児童文学をライフワークと定め、まずは英米の児童文学を研究しようと、いま中京大学の大学院に学んでいます。

新居 正子

◇朝日・毎日の文化センターで安達流の生け花を教えています。お知り合いで生け花を習いたい方、御紹介下さい。

池谷 涼子

◇女・母・妻・姑・嫁・学生・有職主婦・市民運動とマルチ人間などと呼ばれる多面性をもって毎日が過ごせること、そして今なお自分をモラトリウムと思い続ける一種の向上性の中に身を置ける幸せを持てたことにつながって来たと思います。

石川 由紀

◇岐阜市婦人問題連絡会の運営委員として、東京の全国婦人会議の岐阜県代表で出席いたします。井戸 元子
◇△さつき会△を結成、地域ボランティアを始めた頃、△あごら△の第一回集会に出席しました。誰もが社会参加の窓口を探していて、何かしらカッカと燃えていました。今も行政相手にふんばってみるのですが、こちらの持ち駒を逆手に利用されて落ち込み、それでもあきずにやっています。

野村 文枝

原稿依頼をしなかった人の来信を集めたら右のようなことになった。目標を定めライフワークのために自分を燃やし続ける人たち。だが経済的自立には必ずしも繋がらないようにみえる。しかし一方では、

◇仕事をやめて、夫の転勤について全国を歩いていたころ、△あごら△を知り慰められ勇気づけられました。五年前弁護士として再出発、仲間の皆さんに夫との関係などグチを聞いてもらい、仕事を続けて来られました。夫は今は単身赴任中ですが、いい関係になるうと努力中です。

二宮 純子

というように、経済的自立を果たしつつ生き方をさぐる人も多い。喫茶店を経営する立木さん。京都でスナックを持った合田さん。塾と自然食の店をもつ長谷川さん。夫の事務所に勤める古野さん。作家活動が続ける山下さ

ん。ライター兼編集者の三高さん。婦人問題よろず論者(?)で塾経営の高橋さん等々はその例である。この人たちの当日の発言は、家計を夫と共に支え、家事もできる限り分担し合っているというのが多かった。京都から出席された塚崎さんから「東海の人はお金もうけがうまい」という発言があったのは、この人たちや△東海BOCⅤの活動のことを指していられるのかもしれない。しかし内部から見れば、家計を負担できるほどの経済的自立を果たした人はまだ少数に思える。

△あごら東海△の発足当初、わたしが高橋さんに出したはがき(彼女はこれを「家宝」として持っているとか)に、「△BOCⅤの浅野でございます」と名乗っているのを見て、わたし自身驚いた。あのとき切実に仕事が欲しかった。誰もがその思いで最初に集まり、それが不可能なままに婦人問題のグループへと移行したのだった。その後△東海BOCⅤは△あごら△とは別個に発足し、着実に歩みを進めている。これに関わって経済力を手に入れた人もあり、「お金もうけがうまい」という評価が当たっているとしたら、発足当初の△あごら△の目的はますます達成されているといえよう。

かくいうわたしは△BOCⅤ活動には参加せず、塾経営から女性史研究への道を選んだ。幸い大学院を修了できたため、一時愛知県教育史の仕事に携わることができ、経済的にも家計の一部と娘への送金を引き上げたが、今は非常勤の仕事だけである。ライフワークを以てお金を得ることができないとしても、今のわたしはライフワークをとるしかない。お金はそのための最小限しか得られないとしても。

その代わりというわけではないが、婦人問題の歴史的な追究をめざす女性史の勉強会へ知る史の会△を友人たちと開いている。この会は一般的な婦人問題よりもなぜか人をひきつけるらしく、会員は徐々にふえつつある。いつか女性史の書けるグループにしたいと思っている。また住んでいる尾西市でも古文書の会や日本史の会などを持ち、ささやかながら女のネットワークづくりを進めている。ここでも少しずつ婦人問題を語れるようになっていく。このような活動をしつつ自身では女性学の一領域としての女性史にわたしの仕事を残したいと願っている。

当日の発言で多かったのが、△あごら△は「在所(実家)」「ふるさと」「学校」であるという捉え方であった。多くの人が△あごら△で育ち、そして△あごら△から巣立った。みんなそれぞれの仕事をしていて集まりにくい。「同窓会」たるゆえんである。しかしタンポポの綿実が飛び散って芽ぶくように、あちこちで新しい女の集

まりが芽生え育ちつつある。その結果として、あごろ東海Vの活動が空洞化したのだとすれば皮肉というほかない。このような状況を東海地方の婦人運動全体から見るとき、「停滞している」というべきか、「深くもぐった」というべきなのか。「むかしみたいになんて単純でなく複雑になった」(伊藤康子さん・大学教授)ことは確かである。天野正子(大学教授)。大脇雅子、佐藤典子(弁護士)、奥村芳子(中日新聞)の諸姉からも祝福と励ましの言葉を頂いた。マスコミの御助力もいろいろあって、東海地方に、あごろVの名が知られ、入会者がふえたこともあった。

ここまで書いたとき『あごろ東海だより』が届いた。十一月例会は不都合な人が多かったからと、山田さん、加藤さんの文章が載っていた。婦人労働のあり方と意識のめざめ、再就職についての要求など、わたしたちの頃と変わっていないなあ、と胸が痛んだ。何とか会を続けようといふ力を尽くされているのもうれしかった。

◇自分のいらいで三年前からあごろVへ参加、いろいろな友達と出会い、一番のふるさとです。自立への道を少しずつ進展しつつ今は何とか自分のことは自分でできるようになりました。二人の子どものうち一人を扶養することになりました。

◇これからの人生にとって本当に何が大切か、を教えられた五年間でした。

土屋 章子
山田 和枝

「在校生」もわたしたちと同じ動機で入会されていることがわかる。あごろVが「学校」であるならば、その発展は「在校生」の活躍いかんにかかっている。しかし同じ言葉は「同窓生」にも返ってくるはずだ。「学校」での出会いがあったからこそ、現在の生き方があり、さまざまなグループ活動がある。たまには「あのふるさとへ帰ろかな」といきたいものだ。身のまわりに悩む女がいたら、一緒に連れて行ける「学校」であり、いつでも同じ思いを抱えている友と出会えるひろば——あごろV——であってほしい。新旧世代の交歓によって、もういちどそれを実現したいものである。

『あごろ』本誌の経営難は久しく前から聞いているが、一方内容が固くなり人にすすめていくという話も出ている。これは婦人問題の客観情勢の「複雑化」もさることながら、わたしたち自身も客観情勢を自分に引きよせて考えることを怠り、投稿も発言もしなくなっている点に問題がありはしないか。あごろVが「柵のないひろば」であるならば、随時企画やアイデアや意見をもち込み、自由に語りあうという会員の姿勢が本誌の性格を決定するであろうし、そのことが「売れる」ことにつながっていくに違いない。本誌の魅力を支えることも、あごろ東海Vの今後の課題のひとつである。

へあごら東海で出会った仲間たち

グループづくり

友達づくり

山下智恵子

晩秋であった。長い冬に耐えるために、葉を散らせ、エネルギーを内にためようとしている樹々が、冷たい雨に打たれている美しい風情に目をとめる余裕もほとんどなく、私は愛知県婦人文化会館に向かって、小走りになっていた。まもなく満一歳を迎えようとする末娘を、ミルクやおしめとともに、知人のところに預けてきたため、会のはじまりにすっかり遅れてしまっている。

豊敷の部屋へ入ると、すでに数十名の年齢もさまざまな女たちがいた。高校時代のクラスメートである高橋ますみさんと、もう一人の女性の呼びかけで、女のグループが発会する日であった。

あの日から十年。へあごら東海Vは十歳になった。もう一人の呼びかけ人であり、今は得がたい友人の一人である浅野美和子さん

や、東京から産婆役でかけつけてくださった斎藤千代さんの第一印象を、懐しく思い出す。へあごら東海Vのささやかな旗のもとに、

職を離れ、なじんだ土地を離れ、自信を失ったり突破口を捜している女たちが、一人また一人と集まってきた。家の中に閉じこもっているのは、決してなかったであろう貴重な出会いが、いくつも生まれた。

転勤族の妻の悩みを語りあったり、本音で自分と夫の関わりかたをぶつけあったり、再就職が何故こんなに困難なのかを語りあううちに、婦人問題の何たるかに、私たちは気づいていったような気がする。個人的な愚痴に終わらせるのでなく、みんなの問題として考え、整理し、解決の方法をあれこれとさぐりあってきた。

書くことを一生続けていこう。そう決心したのも、仲間との話しあいの中でであった。へあごら東海V発足から二年ほどして、私は婦人公論の女流新人賞をもらうことができた。仲間が開いてくれた祝賀会の席上で、子づれで参加してくださった西尾の岡部栄美香さんに会ったし、伊藤汎美さんが我家のホ

ームドクターであるお医者さまの三男の奥さんであることを知ったりした。

同人誌に発表した私の短篇小説を、仲間たちがコピーしてまわし読みをしてくれた。これが、『砂色の小さい蛇』をBOCから出版しようとした原動力となった。

処女出版にあたっては、斎藤千代さんが、へあごらさんのステージママと呼んだほど、高橋ますみさんが、東京との連絡、マネージメントの一切を引受けて本づくりに協力してくださった。

本が出来あがると、仲間たちが重い荷物をさげて会合のあるたびに、私の本を売ってくれたし、友人知人にすすめて、読書会を開いてくれたりした。

私は決して一人で作家になったわけではない。ひっこみ思案の私の背中を押して、世の中にいってくださったのは、へあごらVに集まった仲間たちの、あたたかな友情、連帯感であったと信じている。

地域で文庫を開き、婦人問題やボランティア活動の拠点づくりに全力投球している人、専門学校の講師をしながら、歴史の研究には

げむ人と、さまざまな道を歩き出した仲間たち。この十年でお互いに自己変革をしたし、自立の夢に向かって努力してきたね、と今私は胸の中で仲間語りかける。そして心の底から、貴女たちに出会えてよかった、あたにかい心を有難うと、いわずにはいられない。

△あごろ東海▽と私

森田 淳子

私が、初めて△あごろ東海▽の例会に出席したのは、高橋ますみさんの中国帰国報告会であった。社会主義から家族制度、働く女のことなど質問が飛びかい、何でも知って吸収したいという雰囲気は、私にとって、たいへん魅力的であった。しかも、その話し合いが、幼児が遊び、走りまわるのを快い雑音として受け入れながら進められていることに、この会の懐の深さを感じ、高橋さんの留守宅の話にまで及ぶのを聞いて、本音で話し合うことの喜び、安らぎを、初めて体験した。

仲間に入れてもらおうと決心し、興奮して帰ったのは、五十二年△あごろ東海▽がすでに四年目に入っている時であった。

それまで私は、自立神経失調症でほとんど

寝ている姑を十年余看病し、一週間に約四時間だけ、紡績会社の通信制高校で講師をしていた。そんな生活の中で、もっと自分自身を向上させ、学ぶことのできる。自分のためだけの時間がほしい。神経を病む姑の前で良い嫁として振るまう重圧から開放され、本音をさらけ出せる場がほしいと思いながら、私の三十代は終わろうとしていた。

街で偶然に、中学校の一年先輩である、高橋ますみさんに出会って、△あごろ▽への道が開けた。

『あごろ本誌』が九号「働く女と主婦の接点を求めて」を発刊した年で、「読者となった。本誌も、初めてかかわった例会も、私にピッタリであった。

名古屋へ行くというと、姑はさすがに目つきをし、私はそれに目をつぶって、エイッと自分自身にかけ声をかけて決心しては例会に出た。その例会で、多くの人と知り合いになった。個性豊かで、有能な人々から私は多くのことを学び、誘発された。私もできるだけ本音でしゃべった。

△あごろ△という団体があるというよりも、あの人やこの人の集合体としての△あごろ▽があり、例会の学習よりも、個々の人への出

会いやなつかしさで出かけていくのではないかと自省したこともあった。

名古屋で全国大会があった時、ある人から、あなたの仕事は、所属団体は、と聞かれ、何も答えられなくて、ショックを受けたのを機に、私も仕事を持ちたい、完全な自立は無理としても、自分の生きがいになり得る仕事を得られないものかと、周囲に働きかけた。

幸運にも、自宅から徒歩で十五分の地に、県立高校が新設され、家庭科の非常勤講師として採用された。

それからは、△あごろ▽の例会にも出席できにくくなった。

新設校の管理教育、家庭科の男女共修、女子高生の進路など、教育上のことで話し合いたいと思っても、時間が無い。

また、以前に描いていた、△あごろ▽で充電し、助けてもらっては、地元で地道な活動をし、また△あごろ▽にもどるという図式も、地元の高校に務めるようになっては、束縛があつて動きがとれない。それだけに、以前にも増して、本音がさらけ出せる△あごろ▽に出たいと思う。たとえば、△あごろ東海▽とかかわりが遠くなっても、「あそこ」へいけば、いつでも話し合える仲間がいると思うこ

とで、ずいぶん、励まされ、勤め続けられる
力となっている。

私が良い嫁を演じ続けるのをおりてしまっ
たら、かえって姑も元気になった。もしかし
たら、一番変わったのは、姑かもしれない。

私は、うかつにも、姑にも生活的自立への
努力があり、道が開かれるべきだということ
に気づいていなかった。

地域に根を張る

岡部 栄美香

新聞の「たより欄」で、水田珠枝さんの講
演会があることを知り名古屋へ出かけていっ
た。そこが△あごろ△で、その時から九年、
会の人たちの本音の考え方と私とがマッチし
たから仲間である。

ある時期、例会には恋人に逢いに行くよう
な熱い思いで出かけて行き、二次会等にまじ
って肌で婦人問題を吸収していた。その間
に、地域では延長保育の実践を市営に移行し、
図書館での読みきかせや、自宅で私設児童館
を開くことに移っていった。

ちょうど、山下智恵子さんの講座へ毎週通
い、私自身を大改革している時だった。『ボ

ーボワール自身を語る』の映画を名古屋でや
り、チケットを一生懸命に売っていた。人や
政党に頼るのではなく、これからは自分たち
がいろいろやって、世の中を変えて行くしか
ないと悟りはじめた時だった。

地域で女性や子供の文化の講演会を開くよ
うにした。都会で聞いた新しいことを、私が
地域の人にわかってもらおうとばくばく話を
すれば、「あの人浮き上がるとる」と言われ
かねない。だったら、その本人をできるだけ
地元にお呼びして、講演会を開くようにすれ
ばよいのだ。人の心に小石を投げて少しずつ
波紋を広げていった。ここ三年は『こうほう
西尾』に案内を載せ、毎月小石を投げ続け波
紋が消えることがない(西尾市へ講演にきて
下さった△あごろ△会員は多い)。

今でも、本当は働いて自分で稼いで食べて
いくのがいいと思っているが、たまたまボラ
ンティアが職業のような主婦になって、仲間
とわいわいやっている。でも、後に生きる女
性には、働くことも主婦ももう少し選択しや
すい世の中にしたと思う。

今の私の気持ちを、夫は本当にわかってく
れて夫婦でいるのではないけれど、妻の活動
を認めざるをえず調和を保っている。

私も五十歳に近づき、過労から慢性肺炎
というやっかいな荷物を背負ってしまった。
「もう余生として生きたら」という人もある
けど、病んで暗い死の淵を覗いて、短い人生
とわかったから、なお一層、自分の生きたい
ように婦人問題にかかわりながら生きたいと
思う。(岡部栄美香さんは西尾市のご自宅の
花島にプレハブで「のびのび文庫」を開いて
います。編者注)

Mさんへ

斉藤 菊代

△あごろ東海△が生まれてから十年目にな
るということ、もうそんなになるんですね。
考えてみれば、それはとりもなおさずあなた
と出会ってから十年ということですよ。その
ことを考えながら今、私は人との出会い
の不思議さを思わずにはいられません。

夫の転勤で名古屋に到着してから一か月も
たっていたでしうか。私の隣のすに座っ
ていたちょっと面白い人があなただったとい
うわけです。その時どんな風に会ったかよ
くおぼえていませんが、あなたが私の中にび
ょんと飛び込んで来たような気がするの

す。ちょうど同じ時期、あなたはイギリスで

研修旅行を、私はアメリカで一か月を過ごしたその時のものもろの思いがあふれ出てお互いに話さずにはいられなかったということもあるかもしれません。それ以来、毎週毎週グループの目的の英語の学習もそこに、私たちは共通の体験を分けあい、お互いの不安を語り、つらい思いに涙し、耳をかたむけあい、時には口角あわを飛ばしつつ時のたつのも忘れて語りあいました。△あごろ東海Vが出来てさらに新しい友との出会いがあり、場所を変えてなお延々と続きました。時には、むちゃくちゃにも見えるような話し合いの中から少しづつ少しづつ自分の弱さを含めて自分自身を見ることができるようになり、それは、今自分はいったい何をしたいのか、その願いを実現させるために、何が障害になっているのかにつながっていくことができたのではないのでしょうか。よくこんなに話すことがあるのかと思いつつ、△あごろ東海Vの日は待ち遠しい日々でした。今考えてみると私にとってはあの頃の一つの新たな出発があったように思います。△あごろ東海Vが十年目に入り、そろそろ次の世代にバトンタッチができる頃でしょうか。きっといろんな役割をは

たしつづけることでしょうが、いつまでも、まず、ざっくばらんで素朴な話し合いができ、女性の痛みや不安を共有しあえる場であり続けることを願ってやみません。

つい最近、私はもう一つの新しい体験をし、思いを深く深くしております。それは忘れていたものへの再会と呼ぶべきなのかもしれませんが。今まではまず、考えたことを言葉にして表現することのみ一生懸命だったと思います。一方これは手から手へ、というか、私自身が私自身の身体に出会うことによって、私の気持ちは相手へと自然に流れ出すといったらよいのでしょうか、そこで言葉は初めて本物になるという感じです。これは一見、簡単なようですが、幼い頃より人間は考える草であると学んで来た私たちには意外に難しいことのようなのです。その時一緒にいた友達から、私どうしてこんなにべらべらしやべれるんだらう、恥ずかしいか、そんな感じなのです。またこのことをお話しできる日を楽しみにしております。さようなら。

(斎藤菊代さんは河野貴代美さん主宰のフェミニストセラピー // なかま // のスタッフです。編者注)

△あごろVとの出会い

—そして今—

長縄 幸子

七年前、私は三歳と四歳の年子の息子を抱え、二Kのフロなしアパートの中で悶悶と暮らしていた。夫は「外で稼ぐ者のほうが上」という思想を潜在的に持っていたので、それに反発する私とよくケンカをした。「名もなく貧しく美しく」という言葉があるが、産後太ってしまった私の場合は、「名もなく貧しく醜く」であり、それでも毎日懸命に生活していた。

その時の気持ちを、朝日新聞の「ひととき」欄に投稿した。今から考えれば、それが△あごろVとの出会いとなったような気がする。なぜなら、それが縁で朝日新聞の近田さんと知り合い、高橋ますみさんを紹介してもらったし、私の投稿文をある本に載せてくださった天野正子さんの講義が△あごろ東海Vであったので、先生にお会いしたくて、その会合に出席したからである。

おそらく、そういった成り行きがなければ、△あごろVという変わった名前所には、自

分から足を運ばなかったのではないかと思う。その時の天野正子さんの話も素晴しかったが、何より私の心を打ったのは、大きなお腹を抱えながら、テープの準備をしてテキパキと働いている女の人の姿と、その仲間らしい人々の活気あふれる会話だった。

子供を持ったら何もできないという固定観念に囚われていた私は、生む直前まで学習しようとしている女の人を見るのは、まさに衝撃的だったし、そのチームワークの良さにも感銘を覚えたのである。そこには私がそれまで一度も見なかった女の人たちがいた。

その時、私はその人たちを手本とすることに決めた。まだ若かったので、十年後に彼女たちのようになっていけばよいことにした。十年は長いから、たぶん大丈夫だろうと思ったのである。

その後、私は△あごろ△にかわりながら大学に一年間通い、通信教育を一年半受け、養護学校と小学校の免許を取り、四年間講師として教壇に立った。私の目的であった経済的自立も果たし、念願だった外国旅行にも行った。夫との間の平等もかち取ったし、夫の給料も少しは上がった。子どもたちも大きくなり、私の手をわずらわせることはなくなっ

た。三十五坪の家を建て、狭さの恐怖から逃がれ、銭湯に行く必要もなくなった。

△あごろ△に入ってから六年が経った。ずいぶん変わったが、変わらないことが一つだけある。仕事である。何かいつも定まらな

い。満足できない。講師生活も不安定なので、今年の四月から自宅で学習塾を開いた。しかし収入は教師をしている頃に比べると半減し、自分が一生かけてやる仕事にも思えない。六月に、「教育問題研究所」なる事務所を作ったが、資金難と仕事の内容に自信が持たなくてすぐに閉じた。

今はただビジネス書ばかり読みあさっている。もう三十冊以上は買って読んで思う。残念ながら、『あごろ』本誌は私の読む本から遠ざかりつつある。最近の本はとても硬いし、私の興味はどうしても仕事のはうへ行ってしまうからである。仕事が不安定なだけ、私の仕事への執着は強い。『あごろ』本誌もできればビジネスに関する情報を入れてほしいと願っている。

来年からは取り寄せる本を少し整理しようかなと思っている。読まずに本棚へ行く本が最近多いからである。しかし『あごろ』だけはたぶん一生取り続けると思う。人も本も、

私の心の故郷であり、私が私であり続けた恩人だからでもある。

十年まで、あと四年。少しでも納得できる自分であつたらと思う。

私と△東海BOCV

中野 節子

△あごろ東海△の発足を新聞で知った私が、会員に加わって十余年、途中、会費を払わなくて(自分の力で得た資金で支払った)とぎれた時期もあったが、ずっとその活動状況を見守り続けた古い会員であると自負している。距離的に離れていることもあって、付かず離れずの状態を保ちつつ、マイペースでかわりを持ってきたと言える。

そういう間に、気づいてみると、一期生たちはそれぞれの能力を生かして各方面で活躍を始めており、現在、二期三期と後に続く若い人たちが△東海BOCVという窓口を通して新たな活動を始めている。

私はと言えば、時折顔を出して刺激を受け自己を叱咤して自分の生きる方向を模索したり、壁にぶち当たって悶々としている折には励まされ、『あごろ便り』を読み、勇気づけ

られてきた。

「外に向かつて目を開く努力を惜しんだり自分がまず動こうとしなければ何の前進もない。誰もが悩んで苦しんでいる。だからこそ……」。彼女たちはいつも異口同音に叫んでいた。

評論家あり、女性史研究学者あり、ビジネスマネージャーあり、弁護士あり、音楽家あり、先生あり、カウンセラーあり、喫茶店主あり、作家あり、デザイナーあり……と、何でも屋さんが私の前に揃っている。何と心強いことか。私にとって唯一の、バックボーンである。

「女の敵は女である」と誰かが言ったけれども、女の味方は、まず女であらねばならないと私は思う。多様な考え方を持ち、多彩な能力を持つ私たち女性が、相互理解をしながら共に仲間を作り、育て合いをして、一つの流れを作り上げるべきである。

消極的で人づき合いの下手な私が、今、小さな塾を開き、子供たちを前にして語り、片方で主婦学生として大学に学ぼうという道を見出したのは、根底に「あ、ごらVのささえがあったからこそ」と、しみじみ感じるのである。

十年目の出会い

立木 侑代

△あごら東海Vのメンバーである浅野さん、高橋さんに初めてお目にかかったのは、△国際婦人年あいちの会Vの初会合が、短歌会館であった雨の降る夜でした。ほの暗い和室の中に二、三十人の女たちが、ぼそぼそと話し合いながら会の始まるのを待っていました。中年に見受けられる人もいれば、タバコの煙をまき散らして片ひじ張っているように見られる若い人の一団もありました。自己紹介が始まり、「主婦です」と答え、一人で参加した私のほか、「主婦です。△あごらVの会員です」とおっしゃった二人連れが浅野さん、高橋さんでした。

お二人は、私同様素人くさく、「市民社会」「ギリシャの昔」や「アゴラ」というハイカラに響くことばとはどこかチグハグに感じられました。

帰りぎわに名刺を渡され「私たちの会へもどうぞ」と言い残された。同じ主婦同士の心安さから、YWCAの二階で開かれる△あごらVの会合にも顔を出すようになりました。

「女の自立」「経済力」って言ったって、「一体どうすればいいのヨ?」と言う時代でした。

私にも就職のチャンスは、さらに十五年もさかのぼる短大卒業の年に一回だけありましたが、それは今の大卒女子の就職よりさらに困難な時代で、最終的には落とされてしまったという苦い経験だけが、心の傷となっていたいました。

結婚が早かった上にすぐ長女が生まれ、当然のように生活費にこと欠く状態に見舞われました。実家の父に借金を申し込み、アパートを建て、五年計画で返済をするかたわら、日中は夫の父の運転手を兼ねての仕事の手伝いをする。そんな生活がしばらく続きました。次女が小学生になる頃には、借金の返済もすみ、父の仕事も減っていましたので、暇だけはありました。

PTAの仕事を手始めに、さまざまな婦人たちの会合に出かけ没頭しましたが、何事にも一生懸命になりすぎる私に社会の壁は厚く、善意だけを押し売りしている状態に心の満たされない毎日が続きました。

理屈ばかりゴリ押していても道は開かれない。お金にかかわることをしてみないことに

は。実社会にふれてみないことには。何もわかっていないんだから。と方向転換を計りました。

しかし何の手掛りもない私は、新聞の求人欄を見て、片っ端しから履歴書を送りました。そして面接の末、ある大手の証券会社の婦人貯蓄係の職にありつきました。基本給七万円余の他、歩合給がつき、月十万円程度にはなる見込みとのことでした。三カ月の研習期間の後、国債による貯蓄を月掛けで勧誘、集金する仕事を与えられました。憧れの共働きの生活、初任給とやっと社会人になったような気分を遅まきながら味わいました。

金融機関での人遣いの巧妙さの前に、やはり私の一生懸命になりすぎる性格は、仕組みを知ってしまったばかりかしく、電車、バスを使って毎日県下を歩き廻る生活に、靴の足の足はマメと魚の目でビッコをひきそうに痛めつけられました。負けん気で頑張れば頑張るほど、むなしさばかりがつのります。

もっと自分を生かせる仕事がしたい。

私に少しばかり自信のあることと言えば、商家の生まれであることと、短大での専攻が食物に関するところくらいだ。これを生かす仕事をしようとしたし、一年程、市内をくまな

く廻って店舗物件を探しました。喫茶学校へも通いました。公の機関にも当たって資金調達の資料をも揃えました。やっと自宅の近接地にビルが新しく建つのを待って、目的の地としました。物件を決め、手付け金を打ち開店するまでに十日ほどの日程しかなく、金融公庫を利用することなど物理的に無理だとわかりました。大急ぎで近隣の銀行を一つ一つ相談して廻りましたが、女の未経験者が水商売をすることに、どこもオイソレとは話を聞いてくれません。やっとのことでその内の一つと話がつき、△あごろV会員の二宮さんにお願ひして会社設立。担保の設定、資金計画、営業計画、保証人の書類提出、内装工事の依頼、従業員の募集、仕入業者との取り決め、喫茶店開店、と文字通り目の廻るような忙しさです。

不慣れな上に思いもかけぬ運転資金不足。疲労困憊であったあの頃を思い浮かべますとどこにあんなエネルギーがあったのかと我ながら感心する次第です。悲憤感はありませんでしたが、「やり切るよりはかなし」と相当な気負いであったようです。近所に類似店ができたり心安まる間もない五年間でした。

競争社会と言う荒海へ、借金を背負い身一

つで飛び出したようなものだと思って居ります。

△あごろ東海V十周年のつどいに参加し、新しい顔ぶれの多いことに今さらのように過ぎ去った年月を思い、刀折れ矢尽きるまでの感を抱きつつも、今ひとたび飛躍できないものかと願うこの頃です。

△あごろ東海Vの思い出

合田 京子

△あごろ東海Vの十年の歩みは、まさに私そのものの歩みであったように思えてならない。ふとした機会で東京の△あごろVから私の手元に小包が届けられたのが『働く女と主婦の接点を求めて』（9号、一九七四、十二月刊）であった。いまあらためてページをくってみるとあの時の感激の残り火は、いまだ私の体内で煙をあげているのにもびっくりした。

その本の中で「十年目の主婦休暇」と題して高橋ますみさんのケンブリッジ留学記が掲載されており、巻末の「△あごろの△あごろ」では浅野美和子さんが△あごろ東海Vの結成当時の様子を熱っぽく述べておられる。当時は

会員の佐藤弁護士のお世話で弁護士会館で会合が持たれ、発足と前後して斎藤千代さんや吉武輝子さん等もおいでになったことを記憶している。いまふり返ってみると、//あごろ熱//という不思議な熱にうかされどおしであった。いまでも目を閉じると何処に誰が坐っていたかまでが浮かぶのである。月一度の例会をまるで複数の恋人に出会いかのごとく待ちわびた。

一方、私の心地よい目ざめとはうらはらに五十年五月、夫が胃ガンと診断され、三か月の命と宣告されたとき、小学四年生と六年生の子どもを眺めながら途方にくれた。母はすでに他界し、転勤先の三河の国、岡崎での出来事だけに心細さはつのるばかりである。口では女の自立などと机上の空論には事欠かないのであるが、何はさておき一家の経済を一身に背負うのは当然である。いまでも時折り女の会などで夫にまる抱えに抱えられながら、経済的な自立より、もっと精神的に満たされるものでなければいや、などという発言を聞くと、むしろが走るのききとこの時の後遺症がとれないのだとふと思う。働くことは生来好きであったが死ぬことが判っていながらつぎ込むということはほんとうにむなし

いものであった。そのような状態の中でも必ず例会には出席した。そしてその二、三時間の心のふれあいが、その後一か月間の私のエネルギー源でもあったのである。入院中の夫のことを院長と看護婦に何度も頭を下げ、埼玉の国立婦人教育会館での全国大会にも参加した。夕方六時すぎ遅れて着き、トイレにかけこむとビールに血を混ぜたようなものが、力なくチョロチョロと流れ出た。そういえば起きてから用を足すことも、食事をとることも忘れていたのだと、その流れ出るものを見ながら気がつく始末である。//あごろ東海//と出会った五十年から京都に帰るまでの六年間と、その後の三年余は私の生涯の中で己の力を試される時期であったとつくづく思う。その時のハングリー精神と人の情の機微は、こよりのごとく相交錯し、今も心に深く受け継がれている。五十五年、夫の三回忌を終えたという安堵と自分の心と目で見えたものの以外には信じないという生まれながらの性癖で、さしたる力も持たずしてデンマークで開催された世界婦人会議に//あごろ//の方々と参加する機会を得た。盲人が象に触れて評することく、私はそのどの部分に触れたか、さだかではなかったが、私なりに吸収することは多々

あった。いま、京都で女の勉強会と称して//グループ金木犀//というささやかな会を主宰している。帰郷する一年前から準備して発足し四年目を迎えた。三、四十名の小会ではあるけれど、ホンネで語ることをモットーにしている。机上の空論はここでは通じない。初めて来た人が自分の意志をどこまで伝えられるようになるか、ということに私は興味を持っている。そしてこの会を舞台にして自分の求めるものは何なのか!より専門的なものを求めて果立っていったほしいと願う。連帯を通じて個の確立を。できることなら男も子供も一緒にたつて人間問題を論じたいと思う。ちなみに当時小学四年と六年の子どもは、大学二年と四年になろうとしている。//あごろ東海//のみなさん、十周年おめでとう。そして、ありがとう。

京都の竹林はほんとうに美しい。竹は節があるから美しいのだとつくづく思う。

(京都にて)

△あごろ東海▽と私

伊藤 汎美

今、//あごろ東海//で例会を持つメンバー

はほんのささやかなものである。ほとんど運営スタッフで好きなように(?)やっているといえようか。しかし、私は今、本当に「仲間」を得たという気持ちになっている。五人のスタッフがまさに平等で、言いたいことを何の気もねなく言えて、後に残らない。

いつもきちんと筋道を立てて進むことを信条とし、一つ一つ確認して納得し合ってから始めることを要求するため、時々うっとうしがられるが、それだけに誠実な土屋さん。素直で率直で「論理と感情を分けて考える」が口ぐせながら、分け切れずに悩むという真面目な加藤さん。バイタリティと行動力抜群、それでいて実にきめ細かい配慮や心遣いをみせる長谷川さん。聞き役にまわることが多く「そうねえ、でもこういうふうには考えられないかしら」と言葉をはさむ、あったかくてやさしい山田さん。そんな中で勝手なことをいい、混乱させ、情緒不安定気味の私はいつも救われている。もちろん最初からそんないい関係でできたわけではないが、率直で自分を出しおしめない(実に私は出しおしめない、人間なのだが)、誰もつんぼさじきにしない、ということがあった。ただ、スタッフのいい関係と△あごら東海Vの広がりとは正比例し

ていかなかったのは残念ではあるが。いい仲間を作るという意味では、私が△あごら東海Vに参加して得たものは大きい。

△あごら東海Vは発足十周年になるというところだが、例会に参加しだしてから九年になる私は、いわゆる「一期生」にあたるのだろう。しかし、「一期生」の方々が、それぞれに自分の場を持ち飛びたっている中で、私は相変わらず「翔べないおんな」でいる。みんなが口々に「△あごら東海Vはふるさとよ」「実家みたいなもの」といわれるところをみると、さしずめ私は「実家の長男の嫁」といったところだろうか。もちろん、それだけに風当たりもきつい。最初から私は「長男の嫁」などになるつもりはなかったのだが、どうも「そのつもりで嫁に来たんでしょ」と思われていたらしい。その長男の嫁から引っぱり出してくれたのが、今のスタッフの仲間たちでもある。

△あごら東海Vでは、稚拙なものが『△あごら東海だより』というニュースを五年前から発行している。最初はどうなテーマで例会を持ったかという記録を残したくて作ったのだが、時には意見発表の場になったり、呼びかけの場になったりもしている。時々「たより

を読んでもからつながっている気がしているわ」とか、「すっかりグループ活動から離れてからすみからすみまで読むの」といつてくれる人のあるのを支えに出し続けてきた。

ただ、四年前に△あごら東海Vはあくまでも△あごらV会員の東海拠点であって△あごら東海V独自の会員組織はないという確認をしたはずだけど(さんざん議論して)、古い会員でたよりの発送をこたわっている人たちが「私は△あごらVの会員だけど、△あごら東海Vの会員ではない」と言うのを聞くと、あれ、と思ってしまう。拠点の活動というものの位置とその役割がその時々によってどうもあいまいになるのは、良い面もあるが拠点を預かる者としてはとまどうことも多い。

主婦を主体として活動をしてきた△あごら東海Vとしては、新しく例会に来た人に対して、「一度読んでみて」と差し出せる核となるべきものに、今の本誌がなっていないという点は、やはり一番の悩みでもある。

△あごらVは

再発の原点

山中 洋子

△あごろ東海Vの会員と名のるには申しわけないほど最近の例会の出席率が悪い私ですが、「それでも、△あごろVを離れられずにいる会員」という立場で少し書いてみたいと思います。

実は私、△あごろ東海V発足の日を知っている数少ない一人なのです。当時、私は結婚して名古屋に移り住んだばかりでしたが、自由気ままに、と同時に生活のすべてに自分で責任を持って暮らしていた東京での独身時代にくらべ、結婚後の生活は百八十度の転換で半ばノイローゼ状態でした。同族意識の強い土地柄のせいもあり、結婚とは、私とは全く価値観の違う親族ともつきあいが始まるということに初めて気づき「結婚とはこういうことだったのか、女性の地位とはこういうものだったのか」と私自身の判断とか意見は全く要求されない生活に押しつぶされそうだったのです。

そんなある日、新聞に△あごろ東海Vが発足するという記事が載りました。その写真の大きさ、呼びかけ人である浅野美和子さんの表情は、不思議なほど今でもはっきり覚えています。

当日は雨。名古屋に来て日の浅い私は地理

がわからず、とにかく行ってみようと必死の思いで地図を片手にタクシーに乗りました。その緊張ぶりは、はからずも同じ建物で行なわれていた『かけこみ離婚相談』に行くものと間違えられて、降りぎわにタクシーの運転手さんに励まされたほどです。

私と同年代の人がほとんどいなかったことや、呼びかけて下さった方たちと違い、私は働くというよりはむしろ話し合う会を期待して行ったこともあって、最初からみんなと意見がびったりあって、共感して△あごろV会員に——とはならなかったのですが、話せばわかってもらえそうな人たちがいる、それは何ものにも変えがたい魅力でした。がんじがらめになつていた私に初めて感じられたかすかな風穴のような思いだったのです。

働き出したり、出産で中断したりもしましたが、その後、△あごろVで知り合った人たちが三人で子育て中でも自分を磨き続けようというグループ△びゅいの会Vを作ったり、△BOCVで少しずつ仕事をもらったりしながら、十年たちました。この十年は、行きつ戻りつしながらの、歩みの遅い十年でした。が、その間、△あごろVは、私にとって何かを決意する時や、迷った時に方向を指示して

くれる存在だったような気がします。△あごろVですてきな生き方をしている女の人たちにたくさん出会わなければ、結婚と同時に、「私自身の人生は終わり」という感じだったことを思えば、再出発の原点が△あごろVだったといえそうです。だから、形ではほとんど△あごろV会員として活動していません、△あごろVの悪口を言う人には腹が立つという、心情的には、しっかりとした△あごろV会員のつもりなのです。

まわりにたくさんいる夫の身内の目を意識して出かけることさえ思うようにならなかった私が、今は、自分の好きなことを自由にやってほとんど毎日出歩いているのですから、△あごろ東海V発足のあの日に出かけたということは大正解だったと思っています。

△あごろVとカメラと私

長谷川 友子

私が、△あごろVを知って、八年ぐらいたしょうか？二男がおなかの中にいて長男が二歳の時、家族の目を盗んで、学生時代の友人の中で距離的、時間的に会える人を選んで電話で呼びだし、夜車で出かけ、喫茶店で語り

女を抑圧する社会は、
 子どもを抑圧する社会です。
 性差別の二極化に
 互眼にあつて、たしかに
 未来を紡ぐでいい(子)ら。
 21世紀まであと15年。
 1985年元旦

岸枝澄子

あけましてあけましてあけまして

平和と国民の教育権と女の人権を

ついに、ふたつとも手に入りました。

一九八五年元旦

東京新聞 4月1日(一) 第三二二二

日本教師組合

にふふふ

頌春

昭和六十年元旦

今年もまた

勝利への道へ

歩きましょう。

〒980 仙台市北目町四ノ十二

大槻壽子

あけまして
 おめでとうございます
 本年が皆さまにとりまして
 良い一年になりますよう
 心からお祈りいたします

頌春

昭和六十年元旦

大府市大府町松山 一八九八

門 玲子

BOC出版より「江馬細香」化政期の女流浮人を
 再版しました。幕末期の女流の文学者の伝記
 小説です。どうも読んで下さる。

あふら 9 20 9 20 某は
 ます ます 亮 実 されてく
 い 大 変 役 に 立 つ も の だ す

一九八五—元一
 日本婦人内閣 協会 代表
 田中 幸子

「国連婦人の10年」の10年目、性別役割
 分業打破に対する大掛りな巻返し
 おこりそうな気はいいです。こうして動き
 を押し返して、成果といえるもうこ
 かちもうないもつろ。

水田珠枝

1985年春

- わたしたちは歴史を創る人！
 火たねかくすぶっている限り灯は消え
 ません。それはわたしたちをとり合う灯火
 であるたけでなく、歴史へのチャレンジなの
 ですから。
- ひとりの中で〈あこら〉をつくる人・読む人
 が子を結ぶ年になつてくれ。
- P.R. をひとつ！
 3月はいかにこんな本から書き上げます。
 お目にふれる機会がありましたら、必ず
 「左を讀み」してみてください。

フェミニスト
 サイコロジー
 —女性学的心理分析—

しま・ようこ
 —垣内出版—

新しい年が、希望をみう
 平和な年であらうと
 心にふちりやうと
 人間が人間として、こころを社会と
 みんとして、あつちをみうと
 努力する年と
 一八八五—一月 中野と光五、四、二、一八
 金子みり

東京 強姦救援センター

☎03-207-3692

月・水・金午後7時～10時(相談)

私たちは強姦を次のように定義します。

1. 強姦は、女性に対する支配、征服、所有が性行為という形をとった暴力です。
2. 強姦は、女性が望まない全ての性行為です。

レターセット、1部400円。

送料は240円。2セットでも同じです。

TAKE-BACK
THE NIGHT



Women Support Women

女性の心とからだを守るために

Tシャツのデザインです。1枚1,700円。

送料は240円。

センターへ連絡してください。



Women Support Women

千代田区新富4-32-11
セントラル6F 御アタハス

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

Support Women

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「女の使用说明書」

左記に抗議の手紙を書こう!

「いらい」もうやめに閉口を
進めたい。とはい、前途
が難。周囲の状況はあま
悪くはなかり。
時代に流されず、私達自身
でありたい。さうは、表現
の場を創っているとい
思っています。 7027!!

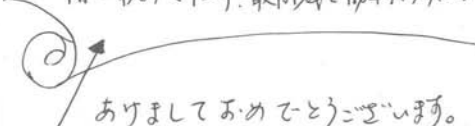
ミニコミ・映 永

ひらひら

札幌市北区北18条西5丁目 18条ビル
TEL 746-2801

= 男女平等は賃金から =

闘い続けて12年、最高峰で勝利判決を!



ありましてあめでとございます。

私たち働く女性の代表として、

男女差別と闘い続けてきた、鈴鹿市の山本和子さんも今年の3月で定年退職となります。

在職中の今が運動の山場、署名、カンパ、守る会ニヌ拡大など様々なことで強力な御協力を、よろしくお願ひします。 1985. 元旦

名古屋市中区千種区千代田
名古屋大学職員組合婦人部
山本和子さんを助けて下さい
事務局 奥田 和子

あひだ
平和の広場
共に生きる出会い

私たちのひらひらに
就労時間短縮反対!
男女差別・反性別
白風信子 保育士教育十教育
丸山新男 保育士教育十教育
白風信子 保育士教育十教育
丸山新男 保育士教育十教育

どの子も地域の学校で
家庭科も男女共学必修で
共に育ちあう教育を!
一自由・平等・平和・自律一
先「性差別主義の論理と心理」に次ぐ
性平等主義、その論理と情熱、

あけまして おめでとうございます。

今年、よろしくお願いします。

1985.1.1

「厚生思想」テーマにした

映画「サリ」上映。

「春の旅」

「三つの花」が世に出

「法の運動」の中で

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

「おのゝかゝあひな

あけまして

おめでとうございます

ファシズムへの抵抗は、
逆の道へ、と思ひます。

1985 年 元 旦

〒167 東京都杉並区下井草1-25-3

天野 子

Tel. (03) 399-8342

賀春

1985.1.1.

今年も何年よりよく指導下さ
いますようお祈り申し上げます。

今年 どうぞよろしく

12月に、住所がかわ
りました。近くはかり
を動いているので、
今年度は、丈夫で、
12月の鉄筋3階建てです。



新住所 535 大阪市旭区大宮3-12-7
TEL 06-954-0114 (変更なし)

研究室 535 大阪市旭区大宮4-20-29
TEL 06-952-9430

連絡先 06-231-3384 (代)
婦人団体研究家 金谷千恵子

今年も
前進を
期す
申し
上げ
ます

山 本 まき子

〒640 和歌山市善明寺六一五-二一

新年あけまして
おめでとう
ございます



ポルノは女への暴力だ!

女はバカで幼稚だ!
女は醜く、若い!
女はみだらで、好きものだ!
女はみな同じだ!
どんな女も自由にできる!

ポルノグラフィのイメージは女への肉体的、心理的暴力である。性的支配であり、侮辱であり、女の物類化である。

ポルノは理論で強姦はその実践である

メンバー
募集中!

ロマンチッククラブと

強姦をつなぐものは何か?

上映についての条件

1. 女性に差別的な場所でないこと
2. 女性の参加者が必ず過半数以上であること
3. 上映会の代表者及び解説者は女性であること
4. 上映後、ディスカッションをすること

スライド上映会を開きませんか?

スライド「ポルノは女への暴力だ」 66枚 45分間

貸し出し料 (上映1回につき)

女性のみの場合 ¥4,000

男性がいる場合 ¥6,000

スライド解説書 1部 ¥300 (解説者用は¥500)

L.F.センター 〒164 中野区中野郵便局私書箱84号

頌 春

1985

見送婦人の10年に続くため
活動を積み重ねよう

良い事は事とたのみます
私も自分の立場であらめず
みなさんに向けて努力します
皆健康で活動下さい

〒154 東京都世田谷区下馬3-20-5

貞 閑 晴

もうあつてはいけ
いのうが、はあなま
論議のせうにまゐる人
判りません。おええに

戦後も四十年
昭和は六十年
おかわりなく
み健やかに
よいお歳を

一九八五年一月

〒152 東京都目黒区鷹番一―一五―三

女性の新しい時代
ごわ見えてぬお世
作りにまみてお前を定
めたりはあられまう。

孫田 良子

自宅 電話 (03) 七二一五三一

事務所 日本貸金研究センター

〒102 東京都千代田区平河町二―四―七

電話 (03) 二二三七―一六二二 (変更)

昭和六十年一月元日

バーバラ

あけましておめでとう
ごさいます
今年もよろしく
お願いします



皆様へ

おけましておめでとうございます。

皆様の御多幸を心から祈っております。

ウィーンから約一時間のところにある
Hainburg 地帯 [Bratislava への境界で] は
ヨーロッパの最後の最も大きい Donau 川の氾濫に
より出来た原始林地帯であります。それが
破壊の危険に曝されています。

水力発電所建設のためには木々が伐採されなければ
ならないということです。

この原始林地帯の重要性をよくしているオーストリア
の人々はこの計画に反対しています。

十二月十日以来数百人(時には数千人)の自然
保護に興味がある人々がこの原始林地帯を
立てこもり、この計画に対する反対闘争を
続けて来ました。結局はこの伐採計画を
中止させることになりました。

人々はこの地帯に国立公園を建設したいのです。
政府は今ちょうど部分的な回答を出しました。
しかしこれは決定的なものではありません。

今のところ一時断絶的に伐採作業は休止されて

AGORA

います。今後また始められる可能性がります。

この件に関して住民投票が行われることに
なるとでしょう。

皆さんがこの私たちの件に関してよく御説明

いただき証明を集めていただきければこの上々く
嬉しく思います。

その証明用紙を私に送りいただきければ私が
それを処理いたしますので

日本のように遠い国からの支援と協力は私たち
を助けてくれるでしょう。

どうもありがとうございます。



ツビレー フライマー
Sybille Pfeiffer

離婚した女性が中心になつてゐるグループで、
現在、全国に千二百人の購読会員が
います。
毎月発行してゐる「HAND」が既に
45号となり、この一年間の購読料二千円をふたつ
ば誰にも会員とされます。東京、札幌、大阪、
水戸、横浜、名古屋、京都、毎月例会をもち、
離婚体験をふたつに話しあひをします。バザーや
ピクニック等の親睦会や他、研修会、宿泊、アコース
ト調査も行つてゐます。昨年から実施してき
面接文、渉収の調査がとうとうまじります。田より子

We からはずはるのごあいさつを

21世紀まで あと15年
婦人差別撤廃条約批准の年
男女共修の家庭科を実現させる年
あなたが
We が
飛翔する年

We 4年目の新しいよそおいに
近刊『子どもって不思議
—学ぶことは生きること—
(長谷川孝著) に
ご期待下さい

1985年 元旦

ウイ書房 青木喜代江 中野敬子
馬場洋子 半田たつ子

182 調布市西つじヶ丘2-25-14 ☎03(326)1380

明けまして おめでとうございます

東海BOCも皆様のお力添えをいただき6年目を迎えることが出来ました。

生活感覚に根ざしたきめ細かな仕事と努力を重ねております。下記のような仕事をお引き受けたいしておりますので、本年もぜひご利用くださるようお願い申し上げます。

新年は7日(月)から営業いたしております。

イベント企画、編集、取材、校正
テープおこし、レポーター、リサーチ、消毒
一般事務等々

1985年1月1日

東海BOC 〒460 名古屋市中区栄一丁目7-26
名急ビル801 TEL (052) 221-6009

運営スタッフ 伊藤 汎美 奥村 和子 桜井 京子
高橋ますみ 田島 美紀 山中 洋子

被差別者としての
女の立場から、現実をはり見定める
眼も持つ教員の生命の芽生えを



めめめ
通信

16 4
1985. 1. 1

ぐるーぷ、め

連絡先 神戸市東灘区住吉山手五丁目
十七ー二二 公庄れい

あけまして おめでとう
ごさいます

あこら武蔵野誕生以来
凡十年がたちました。
御連方についている 結局会
いさへりないままにたつた
何度かあいていたけれど、今では大物
な片断になつてしまつた。あんな 様
な生いゝ中、人のつらかりは多し
くしてゆきます。
今年からは、少し会の様子、あらせ
るも、なつて登場
お、お知らせします。乞、御期待!

1985.1.1.



雪にも
おけず

観測史上

初といわれる
寒さにもめず

かるやかに
かるやかに
熱い想いは

駆けぬぐります

今年は
あこら札幌も
満10才



'85 あこら札幌

あこら海十手目の集

1985年への活動をおめでして

大 高 倫 子
長 谷 川 友 子
山 中 雅 子
山 田 天 子
山 崎 夜 子

岡 部 栄 美 香
奥 村 和 子

十周年おめでとう 塚崎米都子

（あこら京都）
Mika

あこら海十手目の集

あこら海十手目の集

'85年—

今年も楽しいつと"い"をつづけます。
〈あごろ山口〉にたいま会員8人です。



あごろ山口

下関市長府黒門東町1-15 森川方
TEL 0832-46-3181

あけまして
おめでとうございます
一九八五年
平等・発展・平和
そして、あごろ財政再建
のために
あごろ九州の若き層を
全国巡業(松本同交流)
にトライしよう
あごろをひろめて
ケニアへ行こう
元旦
あごろ九州



1985年 元旦
Mitsu Tan

新年おめでとう
ございます
今年も頑張ろう
ましょう

1985 元旦

あごろ京王
一周

♡ かつとばせ!
あごろ
今年 は 行動の年



'85

あごろ 柏 くわはら

あけまして おめでとうございます
ウソでもいいから、本当に
今年もたのしく、元気よく……

こどもとおんなの
からだ費で
紙にはるせ

頌着 あぶらのみなさん! うちらも
少数派ながら、したたかに生きのびてあります。
田無市の「男の育児時間」条例化も再度
継続審議となり、うちらもハラハラしながら
見守ります。とこの世界にも、毅然と立ちまわ
るもの2。400人もの反対請願署名が出
されたとのこと2。うちらも、2月下旬
頃、田無市内2。『男の育児』をめぐる
パネルディスカッション2も南にうかな。

と相談してるところ2です。

あぶらのみなさんも、4エヤカ
な感じで下さいませ。具体的には
下記にご連絡頂ければ幸い2。

(〒165) 中野区江古田4-17-14
ますのきよし気付「育時連」
TEL (03) 385-2293

今年もしごと(い)に3せ?

男も女も育児時間を「連絡会」
(略称)「育時連」

仙川学院へどうぞ

I. 学習塾部

(1)コース：進学、実力養成(小、中、高、成人)。

(2)学科、日時：PM5~9

月一国語、作文。
水一英語、英会話、英文タイプ。
金一数学、算数。
土一個人レッスン。

(3)夏期講習

(4)冬期講習

II. 海外部

(1)海外旅行部

- 1)海外事情、予備知識、マナー。
- 2)パスポート、事務手続、ガイド。
- 3)外国語
 - ①旅行用英会話
 - ②留学一般
 - ③商業英語、会話(公文書、オーダー文、
手紙の書き方)。

III. 相談部

- (1)教育相談(進学、学習、成績向上のコツ)。
- (2)福祉関係カウンセル(心因症、登校拒否)。

IV. 女性の部

- (1)女性史、(2)女性学、(3)翻訳、(4)自分史。

V. アコ・サロン(談話、音楽、ダンス、他)。

*毎月第1週土曜の夜。

※連絡先

(03) 308-7871

謹賀新年 女性文化クラブ

この会は、各種ミニコミ誌を発行しています。
隔週刊で15年経続の同人ニュース(文芸・評論)及
び月刊で、有才女性・女性のおしゃれ・内職パ
ート女性・女性会識・女性カメラの会などの通
信を発行しています。
ミニコミ制作希望の方は、ご連絡下さい。

〒143

東京都大田区北馬込二ノ三六ノ十二

(03)七七七・六〇九一 須藤美代子

あぶらの皆
さま

あけまして
おめでとう
ございます

元旦

1985年
1月7日
150 渋谷区道玄坂2-16-19 しゃあん
都路ビル3F
03-464-7163

A Happy New Year

「焼かれる花嫁ーインドの結婚」

(ジャミラ・ガールズ著、鳥居十代香

訳、三一書房、二二〇円)を

読んでください、

インド・ニューデリーにて

鳥居十代香

元ハ五、一月一日

女のたにかいの年になりそうですね。
いまここで私たちが太陽になるために、
ともどもに頑張りましょう。私は女を
書くことに専念するつもりです。
一月二十二日に長編小説「糸の別れ」(筑摩書房
が出版。そのあと書き下し「家庭内離婚」上梓の
運びです。よろしくお願ひします。

林郁



ことしこそ
ゆっくりゆっくり
あるやまです

ヤ、いとうちめ

『一くく、取場の主人公に……』

と合言葉に今年頑張り

ましょう。

1985

全国一般中部地区支部

シバ通言分會 婦人部

TEL (667) 4811.

A HAPPY
NEW
YEAR

こ
と
し
の
学
び
初
め
は



可
能
性
教
室
で

~~~~~  
いつでも  
いつからでも  
~~~~~

あけまして
おめでとう

昭和60年元旦

コーヒー & 軽食 **ポピー**

名古屋市中区栄3-28-2(松坂屋西) ☎241-6295

古澤 暁子

あて

貴女のかわいた 鬼力を引き出す

ATELIER noda

アトリエ ノダ

野田 敦倭子

〒460 名古屋市中区新栄二丁目13-2 松崎ビル1F
PHONE (052) 241-8418

素

coffee
ジャンボ-NL

名古屋市北区田崎2丁目12-5 大目ビル1F TEL916-1933

有限会社 安養野

代表取締役 吉本 信代

名古屋市北区田崎=田14番24号

TEL (052) 991-4388

「くらし・かえたい」連続行動は、
昨年、ゴミツアー、水ツアー、原発ツアー、
自然塾と、何とも見こみようと連続行動を
続けました。

秋には、「くらし・かえたい・みんなの秋まつり」
を呼びかけ、石油バケツ文化に疑念を抱く、さまざまな
グループ……安全な食べもの、からだ、エネルギー、リサイクル
など……による交流会の場が実現しました。

3年目を迎える今年は、従来のネットワーク作り
(情報交換)はもちろん、連続行動をさらに
深めながら、運動の拡がりを作っていきたいと
思っています。

さまざまな企画にご期待！

「均等法」もついにまな板の上に載った。

いかに、わかりきり、手直しさせるか、
私たちの手腕にかかっている。余力を
振りしぼって、

出来る事全て
やる。



労基法改悪反対!!

男女雇用平等法を成立させる愛知の会

会員 古居 みつ子

女も男も もっと自由に
もっと人間らしく生きられる
社会の実現を!!

山下 智恵子

1985年1月新刊! 「情報化するテレビと主婦たち」

- FCT第4回テレビ断片分析調査報告書。
- 朝のテレビのニュース、ワイドショーが
日々送り出している「情報」の質と量を実
証的データによって明らかにした。
- 世帯たちが置かれている情報環境の
貧しさを知って下さい。疑問を結果して下さい。
- そのためにも報告書の普及にぜひ
ご協力下さい。地域の図書館へお送り
下さい。1部1,500円、送料240円
- お問い合せはFCT事務局へ。

FCT子どものテレビの会

神奈川県葉山町長柄1601-27

tel. 0468.75.8243 (金谷みどり)

1985年・おめでとうございす

さて、まず やりたいこと
いつでも 昔の報をうきすつた
「扶養家族手当」
の、呼び名を 止めさせたい。
「療養労働手当」
と、明るく 変えさせましょ
愛知県 さはし・やすこ

明けまして

みめでとうございす

昭和六十一年元旦

長沼てる子

フライバシー尊重

家事の代役が必要な時

単身赴任の方、独身

の方、共働き家庭、老人家庭、妊産婦の方、その他

ご利用ください

地域 名古屋市内及びその近郊

料金 単身者 週二回、掃除、洗濯 月額二万円

尚、お手伝い願える方が連絡下さい

家事の代行

(株)「ダイコーサービス」女だけで運営しています

一宮市大和町南高井字築路ハ三
〇五八六(四五)〇二二五

謹賀新年

絞りのトータルファッション

- ・ 絞りアート アカデミー
- ・ キャラリー・ム・ショップ

絞り製品... 服飾品、アクセサリー、インテリア、雑貨、本物と人形、フラワー

海外のおみやげ、贈答品にどうぞ



絞り美苑

〒458 名古屋市緑区鳴海町字向田81番地
☎052(523)0678(代)

名古屋市緑区鳴海町字向田81

絞 美 苑

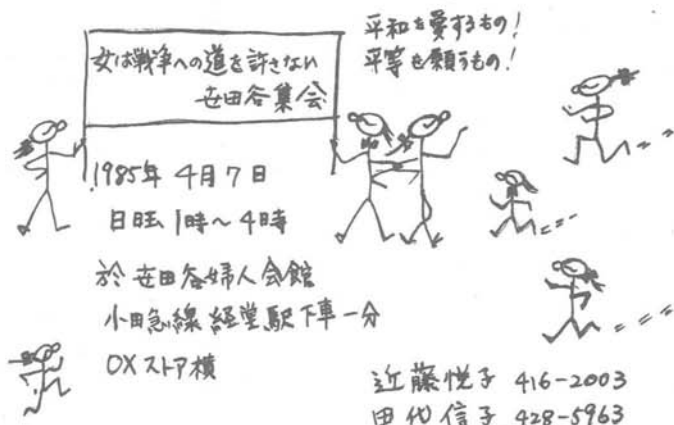
TEL. ☎052) 693-0678

満
二十
一
歳
に
な
り
ま
し
た。

ソ
レ
シ
チ
育
ち
が
オ
イ
ネ

大器晩成

BOC

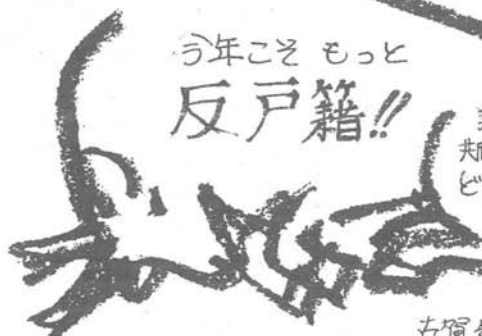


謹賀新年

今年こそ もっと

反戸籍!!

熟、姉
共同保育所
どろんどろん
あそび



1985 元旦

古賀節子
岡村礼志
古賀美礼

今年こそ 自立に向けて

具体的な行動を起し始め

— 地域での生涯学習の場として

学習塾の開き方を教えます。

High Bridge Academy

高橋学習センター

〒459 名古屋市緑区大高町伊賀殿107

TEL <052> 622 - 4926

高橋ますみ

あった。いそいで帰って来て、夜フトンにはいると、わけもなく涙が出た。そんな風に暮らしていた。

△あぐら東海Vの例会に出ること、それは私にとって、(二人の幼児を連れていくのは、しんどいことだった)出かける実感が欲しいことと、しんどさを背おってでも、自分にとって、意味あることと思えるものが欲しいということだったと思う。意味あること——物を作るのであれば、食事とか編物というのではなく、作る先に何かがあると感じられるもの、物を作ることが最終目的ではないということ。

私は学生の時、写真のサークル活動をしてた。△あぐらVの例会に出席すると同時に、以前の友人関係(写真の仲間)をとよりもどし、同時に//写真を撮る//という行為を、日常化しようと思った。△あぐらVの例会では女が主婦がやりたいと思うことをどう考え、とらえて行けばいいのかが話し合われていた。とらわれている意識の変革をその中であることができ、写真のサークル活動が実践となって行った。仲間は仕事が終わってから、私は主婦の仕事が終わってから、仲間の家に午後九時頃集まり、活動のさかんな時は、

週に一、二日、徹夜で、家族や近隣の人が起き出す前に家に着かねばと、車を急がしたこともあった。そんな時は夫とは冷たい関係になり、子どもも二ヒキ、一緒に連れて行った。忍び足で口に指をあて、「シィッ」と言った私の記憶も、長男にはどこかにあるのではないかと思う。今も、こんな生活を続けているが、もう子どもたちはついて来ない。夫も(私も)ケンカがいやになったからか認めざるをえないということであろうか、公認となった。でも、それだけでなく、いろんなところへ私が出かけて、家に持ち帰る情報が、やっぱり彼にとってもよかったからではないかと思う。

出会うことのない女が△あぐらVという例会の場で出会い、知り合うことで、自分の持ち場で、またがんばろうとする気持ちを持ち帰ったりする。情報交換する中で、自分の考えを確かめられる。家の中だけでは自分に引き寄せて考えられない問題も、仲間と一緒に考えることでかなり引き寄せられるし、今の世の中が、そこからわかったりする。

私にとって△あぐらVはそんな場になっていくけれど、ここ何か月?、何年?は、スタッフだけの△あぐらVの場になってしまったように思う。まだ先は開けていけないけれど、

△あぐらVという集いの中で、新しい女たちに出会って行こうと思っている。

△あぐらVと私

加藤 登紀子

一匹狼的なものが好きであった。今まで一人で行動することに慣れていたにも、グループの中で協調しながら何かをやることには慣れていなかった。趣味のテニス、アナウンス、英会話、どれも個人プレーが主である。そんな私が『あぐら』の読者になって、△あぐら東海Vの読者と接触をもとうと思ったのにはわけがある。独身時代、東京の小さな貿易会社に勤めていた時、女子社員のお茶くみの件で上司と議論になり、それが間接的原因ではないかと思うが、クビになった。私自身、その頃はやめようかと迷っていた時期でもあったので、結局は大した波風も立てず会社をやめてしまったが、その時、一人でやることの限界を感じた。結婚してすぐ子どもができた。一生この子に縛られるんだという思いのほうが強かった。団地の壁の中での赤ん坊と二人きりの毎日。名古屋育ちでない私の唯一の頼りである夫の遅い帰宅。仕事や東京への思

い。ありきたりのパターンだが、そうしたイライラや寂しさと一人で格闘している時、『あごらミニ』を読むと、自分の気持ちちが代弁されているようで、スカッとした。今から三、四年前になるうか。その頃が、今思えば一番大変だった。家事は少なくとも気持ちの上では完璧主義だった。結婚して夫の姓にな

ってしまったことも不満だった。そうした、結婚後に噴出してきた私自身の女の問題を具体的に解決する道をさぐりたいと思った。その為には一人ではどうしても限界があり、同じ問題を語り合う人たちが必要だった。△あごら東海△の人たちとは、こうして知り合った。二年間かかわってみて充分それができたかという心もとなない。でも、いろんな人たちの出会いや、不十分なながらも主婦の問題等、話し合えてよかったと思っている。ただ例会では、給食や教育等幅広く扱うので、自分自身これからは、もう少し女の問題にしばれたらという気はする。自然食のお店をもった人、シュタイナー教育に興味をしばった人、△BCOVの仕事を忙し人等々、皆、それぞれ分野をもつようになってきた。例会の出席はスタッフだけという日もめずらしくない。私自身も△BCOVにかかわるようになり

△BCOVの中で、女の具体的問題と少しでもかわれたらと思っている。皆がそれぞれの形で問題追求の場をもつようになったのなら、あえて例会という形にこだわることもないのではないかと思っている。ただ、ネットワークというか、コミュニケーションだけは何らかの形で継続できればと思う。やりたいことが充分にできずに、時間だけがどんどん過ぎていくのが恐い。

「△あごら△なら積極的にやって生き生きするかと思えばそうでもないんだね。僕はゴルフはあまり好きじゃないが、やるぞと思ってるかに一生懸命やるから結構面白い。何をやってもきつと消極的だと思うよ」と、夫は私に言う。ちょっととしたショックだった。そういえば、育児にしろ、料理にしろ、積極的にやる気になれず、つい無難にすまそうとしてしまう。そうした分野は自分には手がだからと思っていたが、それだけではなかったのだろうか。

ただ、何のグループでも、あまりその中に埋没したくない、個人としての自分を主に考えたい気持ちがある。その点△あごら△は個人の集まりという要素が強いのだが、あくまでも基本は自由な自分でいたい。自由な自分

を基礎としたネットワークづくりの一つとして、また、自分自身の具体的問題解決の場として△あごらを位置づけられたらと思っている。

探し求めていたもの

山田 和枝

結婚して間もなく通いはじめた図書館の雑誌展示棚の隅に、さぞ多数の人たちの手がその本に触れたのであろう、かなりいたんでよれよれになって並べられていた五―六冊の本があった。

「子殺しを考える」「働く女と主婦の接点を求めて」「いま女性解放は」これらのテーマの一つ一つに目を奪われ、心を奪われた私。すぐにでもその本を手元にひきよせ一気に読んでしまいたい気持ちがありながら、私は一歩後退し他の書庫に向かったのである。これが『あごら』本誌と私の出会いであった。

それまで私は、盲人用録音テープ製作のボランティアとして細々ながら盲人とかかわっていた。ボランティアをしなから理論より行動の大切さを教えられ、それらを自分の中でじっくりと熟成させた経過から考えると、『あごら』の内容に心が引かれれば引かれるほど

どこかに抵抗を感じ、素直にとびこめなかったのである。理論より実際に何かを行動しながらかかわっていくものが欲しいと、切に願いながらあちこちの講演会、集会に足を運ばせていたのであった。

ある日、勤労婦人センターでの講演会の帰りに一枚のチラシを渡された。〃これからの男女は共に自立していくことが大切ではありませんか〃と呼びかけられたその内容に非常に具体的に何かをしているなと感じるものがあり、早速そのチラシの連絡先に電話した。

それは「家庭科の男女共修生活科」であった。その頃家庭科教科書は、男女別教科書から男女用教科書に移りかわる時期であった。

そんな中で行なった家庭科教科書の見直しは、私に一つの変化を与えた。女子のみ必修をどう打ち出してきたのか、その歴史の変遷、また実際の家庭生活から生じる矛盾、やりばのない怒りをそのまま一度再生しようとしている教科書内容に対する異和感に、改めて自分の置かれている状況を冷静に知らされる思いがあった。——そんな生活科の先輩から「あなたはなぜ△あごろ▽に出てこないの」と詰問された。その言葉を受けた時、やっと△あごろ▽に対しても異和感がとれて

いる自分に気づき、重かった心を開いたことは今でも脳裏の奥深く刻まれている。

はじめて出た△あごろ▽の例会は、その頃急速に高まった右傾化に対して「平和についてちょっと考えてみませんか」と言うテーマであった。総勢三十五名程の参加であった。

一人ひとりが自分の立場から、今をどう受けとめているか順番に発言していった。私は、子どもたちが学校の書道の時間に題字として

〃よい子〃と言う言葉を書かされているが、その題字が気に入らないと発言した。そのことにに対し「そんなことにもこだわっている人がいるのには感心した」とか、私は何とも思っていないかったけど、あなたのその〃よい子〃と発言した口振りに圧倒されたわ」と言っ

て下さった人がいた。その日資料として渡された新聞のコピーを見てハッとした。何と私も読んで切り抜きをしていた記事である水田珠枝さんの〃女とファシズム〃であった。今迄いろんなグループに顔を出しても、すぐに女となれば子供中心の会話になってしまう所に、どうしても自分の心が今一つ開かれていかず、空虚感のようなものを感じており、どうして私は皆と違うのだらうと、自分がつかみきれなかった所があったのである。それだ

けにたったそれだけの出来事が、とてつもなく長く待っていたものが、やっと見つかったという感慨であり、ようやく居場所を捜し求めることが出来たという、深い思いであった。

そんな中で出発したあごろで、何の力もない私が、大した運動もせず一つひとつ築いてきたもの、それはある問題に対し、また日常生活のさりげない問題に対しても、各自の感性を大切に思う心であったと思う。「ねえ、あなたは どう思う？ どう感じるの」と言う呼びかけであり、グループの話し合いであったと思う。そんな話し合いは、私にとってようやく地上に表われた植物の双葉のように、私の中に眠っているものを引き出し、より大きく育てるための基礎であった。

△あごろ▽の友に支えられ、今やっと私は自分を知りつつ社会との接点をみるスタートラインに立ったと思うのである。英会話を生かした職業につきたいと言うKさん、写真が生きがいのHさん、Tさんはピアノ教師をしながら自分の地盤をしっかりと作っている。私にはそれらの人々に続いて書き記す物は何もないけど、△あごろ▽で得た自分の感性の行先をじっくり地域社会の中に根ざしていきたいと思っている。

私

女性運動は行政によって組織されてはならない

一言

——「日本女性会議84なごや」不参加の立場から

水田 珠枝

一九八四年七月二一、二二日に開催された「日本女性会議84なごや」は、「会議」への参加をめぐって、名古屋の女性のあいだに意見の対立をひきおこした。意見が対立することは、けっして不幸なことではない。それどころか、この機会に、女性運動は行政とどうかかわりあうべきかという、これまでの女性運動では見過ごされてきた問題に目が向けられ、論じられたことは、収獲であった。次回の日本女性会議は、川崎市が引き受けたという。今後、各地で同様な問題にぶつかるにちがいない。名古屋での経験や論争が何かの役に立つことを願って、わたしは「会議」に参加しなかった立場から、問題点を指摘してみたいと思う。

ここでは、女性運動と行政とのかかわりあいの歴史的経過を述べたあとで、「日本女性会議84なごや」の問題を考えてみることにする。

戦前の日本では、女性は選挙権も被選挙権もたず、政治結社への参加を禁じられており、政談演説会さえ出席できない時期があった。では女性は、政治的権利をもたなかったもので政治とのかかわりあいがなかったかといえ、そうではない。明治以来政府は、わが国の近代化と対外侵略をおしすすめるために、女性と女性が支える家族を重視し、地域単位に女性の組織化をはかり、勤儉節約、良妻賢母思想、天皇制イデオロギーを国民の末端にまで浸透させようとした。昭和のはじめ日本が中国大陸への侵略を開始した頃には、主婦は愛国婦人会や

国防婦人会に組み込まれて戦争に協力させられたことは、周知の事実である。

この場合女性は、単に政治の道具であったのではなく、ごく少数を除いてほとんどの女性が、政府の政策を肯定しそれに協力をし、指導的立場にあった女性のおおくも、それを積極的に支持したのである。

この意味では女性は政治に参加した。欧米の女性運動が、主として下からの運動として形成されてきたのにたいし、わが国の女性運動の主流は、上からの力によって組織され、女性は抵抗するどころかそれを歓迎し、結局は侵略戦争の共犯者にさせられた。行政とのこの癒着の問題にふれないで、わが国の女性運動を論じるわけにはいかない。

戦後、この問題を重視したのは占領軍であった。GHQのミス・ウィードは、日本の軍国主義復活を阻止するために行政主導の地域単位の女性組織に極力反対し、自主的で民主的に運営される女性団体の成長に期待した。だが、戦前の性格を色濃くもった地域単位の女性団体は間もなく復活し、名古屋の場合を例にとれば、それと並んで他の女性団体もクラブ婦人団体連絡協議会として組織され、この二大団体が行政と太い綱で結ばれる組織となった。一九五〇年代に盛り上がりをもせた平和運動も母親運動も、この問題にメスをいれるまでには至らなかった。

七〇年代はじめのウーマンリブでは、行政とは切れたところで発生

した運動であった。しかし世界的なこの運動のたかまりを受けて、国連が一九七五年を国際婦人年とし、世界会議が開かれるという状況のなかで、わが国ではおおくの女性団体が生まれ、運動が活発になる一方で、政府もまた、天皇が出席する式典をおこない、女性の地位向上に熱意があることを示した。もちろん、国レベル、自治体レベルで計画された女性のための諸施策、その実現に各地で働いた女性担当官の努力を、過小評価してはならない。行政の側の施策や努力がなければ、わが国では女性解放の気運はそれほどたかまらなかったであろうし、それが市民権をもつこともなかったかもしれない。

けれどもこの一〇年間、女性の地位向上に政府がのりだしたことは、わが国の女性の地位が国際水準に比較して低いことを物語るものであった。また政府、自治体がそれなりの成果をあげたことは、わが国の女性運動の弱さのあらわれであると同時に、運動を弱めるようにも作用した。女性が、行政も国連の方針にそって女性のための諸施策実現に努力していると認識したことは、行政からの自立を女性運動の重要課題とするのをさまたげた。

この傾向は、政府による全国画一的な婦人行政の実施と女性団体の把握に、道を開くことになった。国際婦人年を契機に、従来婦人行政にたずさわってきた文部省や労働省のほかに、総理府に婦人問題担当室が設置され、各自治体にも国と同じパートナーの組織がつくられ、国と同じパートナーのパンフレットが発行され、さらに自治体と連携をもつ民間の女性団体の組織化がはかれるようになった。戦前よりスマートで、自主性尊重という形をとりながらも、基本的には変わらない、上からの女性団体の掌握がすすめられるようになった。

「日本女性会議84なごや」の構想も、こうした政治の流れのなかで検

討されなければならない。当局の説明によれば、この「会議」は、一九七七年に設置された第一期名古屋市婦人問題懇話会の「提言」に根拠があるのだという。だがこの「提言」では、内外の女性の交流を抽象的に要求しているにすぎない。具体的には、一九八一年の第二期懇話会（当時わたくしはその委員であった）の席上、委員のひとりから名古屋の全女性団体をまず区段階で組織して「区女性会議」とし、それらを全市的に統合して「名古屋市女性会議」としたいという案が提出された。これが提案された時、ふだんめったに顔を出さない市長がひまができたと出席し、わたくしが提出した、行政が女性運動を組織することへの疑問にたいし、提案者ではなく市長がひきとって答えた。これによってわたくしは、女性会議の構想が行政によるものであることを知った。この案は結局、オリンピックへの女性の動員であり国防婦人会復活であるという反対と、名古屋オリンピックそのものの消滅とによって、立ち消えとなった。そして「当局による日本女性会議84なごや」開催の経過説明には、第一期、第三期懇話会の名は出ているが、第二期は抹殺された。

一九八一年の市長選挙と、同年のオリンピック招致の失敗とは、名古屋の女性のあいだに複雑な意見のくいちがいをうんだ。これらが一段落した翌年秋、女性団体のあいだで、平和集会を開き連帯をはかるという計画が出された。ところが、ある団体に、行政から参加を見合わせるようにとの働きかけがあった。それは、女性団体が平和運動への参加するのを好まず、補助金打ち切りを示唆したある議会筋への行政の配慮であったといわれている。この事実、議会の一部も含めて行政が、行政の手からはなれた女性団体の大同団結をいかに警戒しているかを示している。行政と結びつかなかったこの平和集会は、団

体相互の意見のずれもあって、何回もの準備会にもかかわらず、参加者は多いとはいえなかった。おおくの女性もまた、行政の認知しない集会を敬遠したのである。

翌一九八三年に、予行演習として「名古屋女性会議」が行政の予想を上まわる参加者をえて開かれた後、一九八四年の「日本女性会議84なごや」の開催となった。この「会議」については、行政から各女性団体に、どれかの分科会に参加するようにというよびかけがあった。参加した団体の代表者のなかには、自分たちが「会議」の実行委員だと思っている人もあったが、実際の実行委員会はこれとは別のもので、行政が任命した委員が多数を占め、行政のペースで運営された。分科会の打ち合わせにも、市の職員がはりついた。

「日本女性会議84なごや」が、女性の自主的運動だとしながら行政主導であり、女性団体からみて民主的運営に欠けていたことは、今では常識になっている。問題は、にもかかわらず、女性団体がそれに参加すべきだったのかということである。参加を主張する論理としては戦後、参政権と同時に手にいれた「行政参加の権利」を、女性は有効に使うべきであること、戦前と違って、行政とくに自治体は、民主主義と人権尊重の理念にもとづく制度を保障しており、行政参加によって「国の政策を撃つ」ことができること、自治体労働者との協力が必要であること、行政の民主化のために行政参加をしなければならぬこと、などがあげられている。そして「会議」への参加も審議会や講座への参加と基本的には変りがなく、「会議」への参加を「行政に管理された運動」というのは一面的な見方であるとする。

わたくしは、行政の組織原理と女性（市民）団体の組織原理とは基本的に異なり、女性団体が行政と合体して運動をすれば、女性団体の

本質は損われると考えている。行政は、市民から強制的に徴収した税金を土台に、専門の職員によって運営される上意下達の執行機関である。これにたいして女性団体は、原則的には平等な個人によって構成される自由で民主的な組織であって、会員が会費を出しあい余暇を利用して活動する。この異質な両者が合体すれば、経済力と専門的知識と人員とをかけた行政が、それをもたない女性団体を容易に包摂するであろうし、行政のタテ型社会の原理が女性団体のなかにはいりこむであろうし、その運動は「行政に管理され操作される運動」になるであろう。「日本女性会議84なごや」の運営をめぐるさまざまな問題は、偶然的なものではなく、二つの異質な組織原理の矛盾対立から生じたものなのである。

したがって、戦後女性には「行政参加の権利」を得たので、それを使用するために「会議」に参加すべきだとは、簡単にはいえない。戦前の女性運動が行政によってどのように組織されたか、現在どのように組織化がすすめられているかを検討してみれば、「会議」への参加は慎重でなければならないはずである。

また、革新自治体をも含めて自治体の現状は、そこを足場に「国の政策を撃つ」ことができるほど民主的の制度や手続きを保障しているとは、わたくしには思えない。それができるといふのは、幻想ではないだろうか。すでにみたように、国は全国に画一的な婦人行政の組織をもとめており、ほとんどすべての自治体がその方針を受けいれているのである。さらに、自治体労働者との協力を理由に「会議」への参加を説くのも疑問がある。自治体労働者も、行政の枠に拘束されている。女性団体と自治体労働者とは本当に連帯できるのは、自治体労働者がその職務をはなれ、労働組合の組合員が個人になった場合である。

このけじめを忘れると、女性団体も自治体労働者もスポイルされる危険性がある。

行政の民主化についていえば、女性団体と行政との合体が、行政の民主化にはならず、ミイラとりがミイラになる可能性があることはすでにのべた。行政には、女性団体について考えられているような民主的組織を期待するのは困難だとわたくしは思っている。もし行政に徹底した民主主義を実現しようとするならば、その職務はふつうの市民が誰でもなしうるほど簡単になり、仕事は公開され、公務員はすべて選挙によって選ばれ、容易にリコールできるようにならなければならないだろう。こうした理想は、百年以上も前のパリコミューンで語られた。しかし行政が複雑化し専門化した現在では、この理想を実現するのはむずかしい。といっても放置しておけばこる官僚制の弊害は阻止しなければならないし、行政の民主化はすすめられなければならない。そのためには、行政の職務内容はたえず住民の監視と批判にさらされ、行政はそれを受け止める制度と資質とをもち、公務員は公僕精神に徹する必要がある。この場合女性団体がなしうることは、行政に参加してとりこまれることではなく、行政とは一定の距離を保ち、そこから発言することだろう。こうした自立性を確保するために、女性団体は、組織の維持や拡大にあてる費用を、行政から補助金などのかたちで受けとってはならない。

わたくしは、女性団体は組織原理の相違からみて行政にまると参加するべきではなく、そうした場合には組織原理が崩れるといった。しかし、個人についてはそうは考えない。女性団体は、諸個人が一定の事柄について合意し、それにもとづいて行動する組織であるのにたいし、個人は、その場で自分の言動を判断し責任をもちうる主体であ

る。ここに、団体参加をもとめた「日本女性会議84なごや」と個人参加の審議会や講座との差がある。もちろん審議会にも講座にも、女性運動を操作する可能性は十分ある。その可能性どう認識しどちらの方向に向けるかは、参加する個人が判断するのであり、どう判断したかについて、その個人は責任をもたなければならない。したがって行政の他の職務と同様に、審議会でも何が論じられ講座でも何が語られたかについては、たえず住民の監視と批判にさらされなければならない。

「日本女性会議84なごや」をめぐる論争点のひとつに、最後におこなわれた全体会の決議がある。全体会において、分科会の決議を全体の決議にするべきだという動議が出され、それが起立多数で採決された。ところがその後、この決議は「会議」の最高責任者であり、実行委員会の委員長である市長には責任はないとして、「会議」の名ではなく全体会の名において、当の市長をも含む関係方面に提出されたのである。

わたくしは、一部の分科会の決議は評価するが、すべての分科会の決議を支持はしないし、分科会の決議を全体会で決議したことについても、評価はしない。ここでおきた問題は、女性団体のヨコ型社会的原理と行政のタテ型社会的原理の衝突であり、その処理にあたっての民主的ルールの無視である。

一般に複数の団体が連合して運動をする場合には、諸団体の代表からなる実行委員会がつくられ、それがその行動なり集会なりに責任をもち、決議は原則としてそこで合意されたものに限定される。こういうルールに従うならば、「会議」では、実行委員会が合意をえていない分科会の決議を、全体会で採決してはならなかったのである。

しかし「会議」の実行委員会は諸団体が平等な立場で代表を送る実行委員会ではなく、行政が圧倒的優位を占め、行政主導で運営される

組織であつた。「會議」に参加した女性たちはそれを不満に思つており、またこの点をついた批判グループの存在を意識もしていた。そこで、実行委員会で確認されていない分科会の決議を、全体会で採決せよ、という動議が出されたのである。これは、実行委員会よりも全体会が優越する、つまり間接民主制よりも直接民主制が優越するという考え方なのである。全体会の司会者が、全体会の採決は、そこに集まつた人たちの、分科会決議を民主的ルールにのっとり全体会の決議にした、という総意によるものだと言明するの、これと同じ考え方を土台にしている。このルールに従うならば、全体会の決議は、実行委員会も委員長である市長をも拘束することになる。そうならば、女性団体の組織原理が行政の組織原理を突き破ることになる。(これはとても重要な決議にもかかわらず、反対意見をのべる機会があたえられなかったし、採決に起立をしなかつた人がかなりいたことは、注目する必要がある。)

くり返していうと、実行委員会という代表制を重視するならば、全体会での採決は見合わせるべきであつたし、全体会という直接民主制の上に立つならば、その決議に実行委員会も従わなければならない。ところが決議はなされてしまつたし、そうかといつて実行委員会の主導権をもつ行政も委員長である市長も、米軍基地撤去の要求を含む決議を、簡単に認めるわけにはいかない。結局、何日かたつて、全体会の司会者が、市議會の現状からみて、政治生命をかけてまでこの決議に署名できるほど豪胆な政治家は今どきいないといふ「會議」の責任者としての市長と行政の統括者としての市長は別個の法人格であるといふ奇妙な解釈をして、行政関係者には決議に責任はないものとした。全体会に参加した一体何人が、決議の時に、市長にたいするこのよう

な評価と解釈とを了解していただろうか。とにかくこの処理によつて、女性団体の組織原理、直接民主制のルールはつぶされ、全体会は總會としての意味をもたなくなり、そこでの決議は、軽いものとなつた。(ついでにいうと、わたくしは、この決議に市長も署名することを主張した。それは、ひとつには、全体会で決議がなされてしまつた以上、その基礎をなす直接民主制のルールを貫徹すべきだと考えたからであり、もうひとつは、かつてはわたくしも支持し、間もなく引退が予想される市長が、議會の反対に抗し、政治生命をかけても平和を守る市長であつたことを市民に示す、これが最後の機会だと思つたからである。)

「日本女性會議84なごや」は、二日間だけで終つたのではない。記録づくりなどの事後処理は別にしても、分科会のいくつかは残り、今なお活動している。これらの分科会の将来について予測することはできないが、これらが行政の下部組織、外郭団体にならないことを願っている。

行政とどうかかわりあうべきかといふことは、女性運動に特有の問題ではないという意見がある。だが、戦前戦後を通じて行政がどのようにな女性運動を組織してきたかをみれば、これは女性がもっとも真剣に考えなければならぬ問題であらう。今回の「會議」を通じてわたくしが痛感したことは、女性の行政に対する従順さであつた。個人としての女性が自立なくして解放されないように、団体としての女性も、行政を含む外的權威からの自立なくして解放のための運動はできない。個人も団体も、自分の足で立ち、自分の頭で考え、自分の口で語る時、相互の信頼の上につくられる連帯が生まれてくるにちがいない。

「均等法」通過は五月?

先の国会の会期末に衆議院社労委の審議を終え、参議院社労委に付託された「均等法」。十二月国会での審議が注目されていましたが、十三日の社労委では労働法全般についての審議が行なわれたのみで、さしたる進展はなく、二十日の社労委では審議されないうまま、国会は自然休会になりました。

一月再開の国会は、当分、予算審議が重点となるため、「均等法」が具体的に問われるのは、四月以降ではないかという説も流れていますが、総評が三月に全国総決起集会を開くほか、各団体で二、三月に集会を企画中です。一方、日経連では、「五月連休前後に通過」説を流し、『均等法対策集』も、早くも各種出版され始めました。七月の世界婦人会議を前に、女性差別撤廃条約の批准は果たして可能か、さまざまな問題をはらんだ不気味な年頭となっています。今国会の会期は四月二十九日までですが、延長の可能性が大きく、会期末にまた一波瀾二波瀾があるのではないのでしょうか。

48団体 労基研中間報告で申し入れ

「均等法」で女子の労働強化が心配される折、八月二十八日に発表された労基研中間報告は大きなショックを与えて来ましたが、48団体は

今後の家庭科教育の在り方について(報告)

I 基本的な考え方

高等学校の「家庭一般」の履修の在り方及びそれとの関連で中学校の「技術・家庭」の在り方を考えるに当たっては、次の諸点に留意して検討を進めた。

1 学校教育において、家庭科教育がこれまで果たしてきた重要な役割にかんがみ、今後その一層の充実を図るためには、家庭科教育を小学校、中学校及び高等学校の全体を通して総合的に考えることが必要である。これまでも、教育課程の改訂に際しては、小学校、中学校及び高等学校

①「週の法定時間を短縮し、一日の労働時間を弾力化する」として、「一日九時間、一週四十五時間」を示したのは、とりわけ女性に悪影響が大きい。女性の勤続を困難にするばかりか、労基法の基本精神にも反する。②雇用における男女平等推進のためには労働時間短縮こそ急務。週四十時間、週休二日制、有給休暇拡大を基本とすべき、と申し入れ、労基研報告は「時短」の国際的方向にも逆行すると訴えました。またも走った! イフのリフ!!

女性解放前夜(イブ)、私たちの平等法を!と、84年のクリスマスにも、イブに近い22日、フェミニストたちがヘジキを出発、婦選会館へあごらVと、おなじみのコースをひた走り、終点の労働省で、労働大臣に要望書を提出しました。参加約七十名。

家庭科共修に「灰色答申」

差別撤廃条約批准の要件である家庭科共修は、「家庭科教育に関する検討会議」で、昨年六月十八日以来八回にわたり検討されてきたが、十二月十九日、①小学校から高校に至る一貫性②家庭生活・社会社会の変化に対応③社会教育・家庭教育との関連性重視④教育課程の多様化・弾力化、等を基本に、「選択必修」を匂わせる答申が出されました。前文を除く答申の内容は下記のとおりです。

昭和59年12月19日 家庭科教育に関する検討会議

校の教育の一貫性については十分留意されてきたところであるが、家庭科教育の検討に当たって、改めて学校段階別の教育内容の構成等を見直すことが必要である。その際、小学校、中学校においては家庭生活に係る基礎的・基本的な内容を充実し、高等学校においては、発展的な内容を総合的に取り扱うことなどを考える必要がある。

2 家庭科教育は、他教科との関連が深く、これまで他教科との整合性を踏まえて教育内容の充実が図られてきたところであるが、時代の進展に伴う家庭生活や社会生活の変化に対応して、家庭科の教育内容も見直すことが必要である。その際、家庭生活に必要な新しい知識や技術などを取り入れていくとともに、実践的な学習を重視し、家庭環境の変化を踏まえて家庭生活を営み、その充実向上を図ることのできる能力や実践的な態度などを育てることが必要である。

3 学校における家庭科教育と社会教育や家庭教育との関係に留意し、それぞれの場における教育の分担と連携を図る必要がある。近年、家庭における教育機能が弱体化し、基本的な生活習慣や生活技術が身に付いていない児童・生徒の増加が指摘されている。このような現状からみて、学校教育の中で家庭科教育を充実させるとともに、学校から家庭に働きかけて、家庭の教育力の活性化を図ることが必要である。現在、我が国では、学校教育制度の画一的な性格について見直しが必要とされており、特に高等学校において、近年、社会の変化や生徒の能力・適性等の多様化に対応して、教育課程の多様化・弾力化の必要性が指摘されている。家庭科の履修の在り方を考えるに当たっても、これらのことに留意する必要がある。

5 なお、高等学校「家庭一般」が、我が国の歴史と伝統の上に立ち、多くの国民の同意を得て、女子教育や母性教育のうえで大きな役割を果たしてきたことにかんがみ、今後ともこのことに十分留意すべきであるとの指摘があった。また、男女が協力して家庭生活を築いていくという観点から家庭科教育の内容を見直し、男女共に学べる内容に改善すべきであるとの指摘もあった。

Ⅱ 家庭科の履修の取扱い等

上記Ⅰの基本的な考え方に基いて、本検討会議では、家庭科の履修の取扱い等につき、以下のようにすることが適当であると考えられる。

1 高等学校「家庭一般」の履修形態については、小学校及び中学校における家庭科に関する教育の上に立ち、生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に対応することなども考慮し、男女とも、「家庭一般」を含めた特定の科目の中から、いずれかの科目を必ず履修させること（以下「選択必修」という）が適当と考える。この場合、以下の方法が考えられるが、いずれの方法を採用するかは、高等学校の教育課程の全体的な在り方の中で考える必要がある。今後、教育課程審議会での審議にゆだねたい。

(1) 現行の「家庭一般」のほか、例えば、衣・食・住及び保育などの内容のいずれかに重点を置いたり、家庭生活に必要な知識・技術に重点を置いたりした新しいタイプの家庭に関する科目をいくつか設け、その組合せの中からいずれかの科目を選択必修させる方法。なお、この場合は、当分の間、地域や学校の実態に応じ他教科の科目で代替履修の余地を認めることも必要であろう。

(2) 「家庭一般」と他教科の科目を組合せ、その中からいずれかの科目を選択履修の余地を認めることも必要である方法。

2 上記いずれの場合も、我が国の歴史や伝統を踏まえ、家庭科教育の重要性にかんがみ、今後とも家庭科教育が十分に行われるような配慮が必要であり、教育課程編成に際しこのことを十分留意すべきである。

3 中学校の技術・家庭科教育については、一層の充実を図る必要がある。下に成り立つ家庭や社会における生活の向上を図るために必要な能力と実践的な態度を育てることが大切であり、男女相互の理解と協力の下に成り立つ家庭や社会における生活の向上を図るために必要な能力と実践的な態度を育てることが大切であり、一層の充実を図る必要がある。履修の在り方との関連を考慮しつつ、例えば、すべての生徒に共通に履修させる領域と生徒の興味・関心等に応じて履修させる領域を設けること等について検討する必要がある。

4 なお、今後、高等学校及び中学校における家庭科教育の在り方との関連で、小学校における家庭科教育についても、改善充実の方向で検討する必要がある。

◆『あごろ』発行のためお忙しいことと思います。財政難とのこと、大変ですね。でも貧しいので何もカンパすることができません。心の想いと『新年メッセージ』の広告を送ります。

女の平等と平和の広場△あごろ▽の火は、
 なんととても絶やしたくない、さらに炎を太
 きく燃やしたいです。意地でも△あごろ▽に
 しがみついていたいです。その意味で、意地
 会員」です。でよろしく。(東京 丸山明男)

◆△あごろ▽の窮状、93号を拝見して、胸を
 しめつけられる思いでした。ネットワークの
 中での役割分担については、こんどお目にか
 れましたときに、私に何ができるかをお話
 させていただくかなと思っていました。

次号のためのカンパとして、たったこれだけ
 ではお役に立つかどうかわかりませんけれ
 ど、同封させていただきました。△あごろ▽の
 ために、というよりも、私自身の責任のため
 に、そんな手前勝手な感じもしますけれどお
 許しください。(東京 しま・ようこ)

（温いお心とともにたいへんな大枚いただき

ました。事務局)

◆これをお読みになるのは、85年になってからかもしれないのですが、どうしても84年のうちにお便りを書きたくてペンをとりました。まず、斎藤さんがご病気だったとのこと、

少しも知らず、93号を読んでびっくりしました。長い間、その存在は地味ではあったけれど、フェミニズムの運動の真つ先を、誰よりもきびしい風を真正面に受けながら走り続けてこられた、それが、93号26ページの、AあごらVについては何百枚書いても意を尽くせないだろうという斎藤さんのおことばに出てくると思うのです。それなのに、斎藤さん自身AあごらVが何なのか時どきわからなくなる、と。何度もやめようと思われたけれど、しんどさを越えて一冊つくり終えるたびに、何かがひとつ見える思いがした、名もない方がたからののはげましが、やめられないという気持ちにさせた……と。

私などは斎藤さんの足もとにも寄れない
かけ出しですが、でも少しはわかります。ウ
イ書房をつくってやっと三年余りとはいえ、

その中でひととおりのことは味わわせてもらいました。

お金のないことは致命的です。『いま人間として』が終刊に追いこまれたのも、累積赤字が何字が第一の理由とのこと。お金がなければ何も作れません。斎藤さんは、これまでも、お金のことについてもまったく自身を投げ出して『あごら』をつくっていらっしたと聞いています。その結果が、まさに昭和の『青踏』ともいふべき『あごら』の刊行をこままて続けていらっしたのだと思います。

しかし、私には、斎藤さんを病気にさせてしまったのは、お金よりも「心」だったのではないか、と思えてならないのです。「拠点」と「雑誌『あごろ』」と、どちらにめぐりあったかの違い、というようなことや、斎藤さんと後藤さんの文章が93号の中で悲痛な叫びであるのに、他の方にはそれが伝わっていないように（特に28、29ページ）、あああ、と思いました。それは、私も、程度こそずつと軽くても、同じ質の歎きをかかえているからです。

「楽しいこと」はいいことです。それと「おもしろいこと」とはどういうふうにつながっているのでしょうか。世をあげて「おもしろ」ナントカ「おもしろ」ナントカに束の間の浮世の憂いをなぐさめなければならぬのではあるけれど、初めから「おもしろ」ナントカしか受けつけないでいる人たちは、それにこびている人たち、その潮流の中では、『あごら』も、『あごら』に足もとにも及ばなくても『We』も生きのびられないという思いがそくそくとするのです。どうしたらいいのだろう。せめて実務レベルでお助けできるといいのですが、新参者の私はうろろろと考えあぐねるばかりです。何のお力にもなれないけれどもこの気持ちで今年のうちに書きたい、そんな思いでペンをとりました。ご健康をとりまどされることを、何よりも何よりも祈りつつ。

(東京 半田たつ子)

「お年賀状から」

ことしもたくさんのお心こもる年賀状をいただきました。事務局だけで拝見するのはもったいないので、ほんの一端ですが、メッセージの一部をお目にかけます。

◆参政権の平等をめざす「定数は正」も、市

民運動二十四年にしてようやく政治の緊急課題となり、男女平等の雇用・教育・決定参加など「婦人もんだい」もかるうじて陽のあたる場所に出てきました。これからも道のけわしいことは承知していますが、運動を続けます。すべては平和のため、子どもたちに住みやすい環境をのこしたい一念です。よろしくお力をおかし下さいませ。(東京 紀平梯子)

◆婦人センターの建設を、と声をあげて一年半、明るい見とおしがつきました。婦人対策への取り組み、女性大会開催など行政と女性たち双方に動きが出てきました。「国連婦人の十年最終年をスタートにして」を合言葉にがんばりたいと思います。平和と女性の問題が今年も私のテーマです。(新潟 倉元正子)

◆「児童扶養手当切り捨て反対」で昨年は三回陳情に上京しました。今春も社労委に傍聴に上京します。勝っても負けても言うべきことは言いたい。人間を切っちゃいけないと。仲間のことを思うと、いてもたってもいられぬほど追いかめられそうになります。もう一年は全力を尽くします。本当によろしくお願い申し上げます。(広島 畠山裕子)

◆ことし、女たちは連帯したいと思いませんか。もはや男社会は信用できませんので旗揚げしませんか！(東京 石倉昌子)

◆婦人年最終年といっても何が終わるのか、これからも女性が発言しつづけるしかないのでしょうね。(東京 野々村恵子)

◆散り忘れたかえでの葉が一枚、風もないのにひらひらと舞い落ちる静かな小春日和。田舎にはまだこんな平和な風景もあるのに、平和をおびやかす力の恐ろしさを感じる日々です。(高崎 浦野文子)

◆いよいよ国連婦人の十年の最終年を迎えました。みのりのある年にしたいと存じます。(東京 松浦三知子)

◆国際婦人年からはや十年、△グル連▽でございっしょしたことを思い出します。(東京 田中喜美子)

◆女性の歴史に残る良い年になりますよう。(広島 佐々木愛子)

◆女たちにとってよい年になるといいのですが、なかなか……。 (東京 鈴木真奈美)

◆家庭科共修ばかりで一年を過ごしました。婦人年の最終年、この先どのようにすればどう変わるのでしょうか。私に何ができるのでしょうか。(東京 石川由紀)

◆今年もしなければならぬことが山のようです。無力さを敷きながらも、連帯の輪を強

めることで地域での運動を進めていきたいと念じています。

(東京 近藤悦子)

◆家庭科共修もほかの運動もまだまだ長期戦のようです。体が続くように気をつけながらがんばらなければ……。

(東京 梶谷典子)

◆いずれ「平和と平等」は実現はずです。人類はそんなに馬鹿ではありませんから。折御健闘。

(秋田 渡辺誠一郎)

◆△あごろVの御発展を！そして女たちの新しい力の展開を！

(埼玉 水野るり子)

◆ごとしこそ業務の安定と拡張をめざしましょう。健康を保つのも活動の第一歩だと思います。

(名古屋 高橋ますみ)

◆△あごろVのご奮闘、心に刻んでおります。ことしも元気でがんばりましょう。

(埼玉 広田寿子)

◆『銃後史ノート』も次号で一応終刊、ホッとしたようながっかりしたような……。△あごろVの御健闘を祈り上げます。

(神奈川 加納実紀代)

◆住民が力をつけるということは心をあわせ連帯することだと思ひます。昨年は、名古屋で開かれた「女性会議」をめぐる名古屋で活動している女性たちの意見が大きくわかりました。行政との協働って本当に大変だと

私はボランティア活動を通して常に思い続けてきました。その上で一番大切なのは、住民側が力をつけることだということを知りました。

(名古屋 野村文枝)

◆人まかせにしたいくないことの余りに多く、自分にできることの余りに少ないことを感じる日々です。己れの力を見くびらないで、できることを積み重ねなければ、思いを新たにしています。

(横浜 山里倫子)

◆お蔭様で△のびのび文庫Vは五年目、△女性セミナーVは四年目です。毎月、大脇さん、山下さん、浅野さん等お呼びして波紋を投げています。続けることが大切と思い、一病を持つ身になってもがんばります。

(西尾 岡崎榮美香)

◆△金遠ホー△の△あごろV、事務局の方の健康も含めて根本的に考えなおさなければならぬようですね。『△あごろ』を買ってケニアへ行く！——このキャンペーンで明るくがんばります。

(福岡 小島豊子)

◆日経婦人面の年間テーマは「おやじ」です。女の視点から現代の「おやじ」の状況を見ると、どうなのでしょうか。(東京 尾崎 雄) ◆『情報化するテレビと主婦たち』『FCT テレビ魔絶(仮題)』——この二冊の本で私の

一九八五年が始まります。この一年もまたテレビの力を過小評価することなく、見えないもの、見えなくさせられているものを見つめ続けたいと思います。

(神奈川 鈴木みどり)

◆今年はいし年、私の年です。歩みはおそくても、一歩一歩確かな足どりで歩きたいと思っています。婦人年最後の年、女性のため頑張ります。

(浜松 小沢明美)

◆一昨年と昨年は大作に取り組みすぎ、いまや、やや放心状態。これからソ連の本を千四百枚書かねばなりません。(東京 下村満子)

◆一年の疲れが出て、この休みはどこへも行かず休養しています。(東京 赤松良子)

◆昼間も暗い冬の寒気たつぷりのスウェーデンからひとびで日本に帰ると、お正月がひとときわ光り輝いていました。

(東京 ビヤホール多美子)

◆心ならずも何のお手伝いもできず、申しわけなく存じますが、私としては、現実の「老い」の実態から逃げず、目をそむけず生きることも一つの仕事ではないかと思っています。『今年も多難な年になりそうです。お互いに励まし合って平和と平等を守り立ててゆきたいと存じます。』(浦和 石川房子)

◆昨年『思想の科学』九月号で「少女の世界はいま」を編ましてもらいました。如月さん、三井マリ子さん、加納さん、矢川澄子さん、それから亡くなった柴田道子さんたちにも手伝っていただきました。（東京 熊谷順子）

◆昨夏、一か月入院生活をおくりました。それまで自分の力で生きてきたように思っていました。病院のベッドのなかで、有形無形のかたちで、たくさんの人々に生かされていた。これからの人生を、わたしらしく、みんなといっしょに、一步一步、生ききっていきたくと思っています。ホントにありがとう。（東村山 山本かなえ）

◆牛の目はうるんでいる。そのやさしさと忍耐で。（東京 佐藤欣子）

◆牛のごと鈍重に 牛のごとやさしく

牛のごとたくましく あゆみつぐ日を生乳やの娘に生まれたわたしは牛とともに育ったので感慨深いものがあります。ことは国連婦人の十年のしあげの年、「平等・発展・平和」がみんなのものになるよう、わたしもその一翼を荷いたいものです。（伊勢 山村ふさ）

◆八一年二月まで娘が△あこら▽の英会話で

お世話になっていたのが昨日のようです。その娘はいま北京大学に留学しています。私は子育て終了後、経済的自立を得、目下は気楽なひとりぐらしですが、自分で立っている分だけ時間に追われています。が、充実しています。『あこら』の読者ですみませんが、大切に読んでいます。（東京 深田範子）

◆心臓のフシ穴はふさがり、一年たちましたらやっと体調も整ってきました。これからは目のフシ穴もふさぎたいものです。良い年にしたいですね。（東京 米津知子）

◆「自立の心理学」の講座も足かけ三年目。持続していく力がつけばよいなあと思っています。（東京 武山久恵）

◆戦争を語りつく文集『萌芽』に24号の一部を転載させていただき、ありがとうございました。（東京 武山久恵）

一月五日、ことし最初の△毎週毎週デモの会▽が始まります。もうすぐ二年になります。△老後保障をすすめる会▽が十月二十五日結成。じっくりあせらず輪を広げていこうと思っております。（東京 木間篤子）

◆84年は国籍法の改悪や児童扶養手当切り捨て攻撃などもあって多忙をきわめました。その一方で事務局体制、機関紙発行体制も整い、

五回の公開講座、二回の拡大定例会もすべて成功。地方にも連絡先ができるなど、ミニ・グループにしてはまずまずの活躍ぶりであったと自賛しております。今年は国勢調査なども控えており、旧年にも増した取り組みを覚悟しています。（東京 佐藤文明）

特集31号は二月初旬の予定です

恒例ですと十二月に発行される31号は、財政難や、事務局に病人続出などで遅れておりますが、友情のカンパを次々にいただき、二月初旬にはお手もとにお届けしたいと、編集を急いでおります。

原稿はすでに締め切りましたが、緊急にどうしても入りたいという記事がありましたら、ご一報ください。テーマは、「私にとっての平等・差別」。職場や家庭、学校、地域社会などでの問題点をどうぞ。テーマ以外でも、緊急に皆さんにお知らせしたいことがありますたらご連絡を。☎03-354-3941

〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会場・連絡先
1月16日(日)	18:30—21:00	教科書問題を考える市民の会 月例会集		国史文化会議室(飯田橋山岡ビル)
17日(木)	18:30—	「離婚に役立つグッドアイデア」△ハンドインハンド東京▽要予約		サンパティックサロン(新大手町ビル1F)
19日(土)	13:30—16:00	あこら旭川・例会		小坂宅 011-644-2927
	14:00—	連続ミニ映画祭「子どもたちと戦争『ピカドン』『はだしのゲン』ほか		神奈川高校教育会館ホール
	14:00—	講演会「善意という名の管理」 日高六郎 保育あり 500円		埼玉県狭山市民会館
	14:00—17:00	女の映像制作講座 △メディアアンナ▽		すべーす・えいがさい 370-6007
20日(月)	11:30—15:00	あこら大阪・例会		藤井宅 03-308-7871
	10:00より3回	『ドイツ・青ざめた母』上映会 △広島おんなの映画祭85▽		広島平和記念館
23日(水)	18:30—21:00	「アジアの出稼ぎ女性の状況」フィリピンを中心に△アジアの女たちの会▽		渋谷勤労福祉会館 03-508-7070
24日(木)	10:00—12:30	あこら東海・例会 連絡先 加藤(石川方) 0561-319-2308		佐世保市立図書館
25日(金)	10:30—12:00	あこら佐世保・例会		ますの宅 03-385-2293
	19:00—	男の子育てを考える会例会		日本社会事業大学(国電原宿徒歩5分)
26日(土)	13:30—16:30	ニコニコ離婚講座「専業主婦の離婚」「離婚に必要な法律と手続き」		日本女子会館5F(芝公園21618)
	14:00—16:00	「国際社会と私たち その三」——東南アジアの婦人と生活——		福岡市立婦人会館
	18:30—	あこら九州・例会		かわら版事務所 042-343-6749
	19:00—	あこら武蔵野・例会		大阪府情報センター(住友中之島ビル5F)
2月2日(土)	13:00—16:00	離婚講座△ハンドインハンド大阪▽連絡先078-361-0834細谷		婦連会館
	13:30—16:30	本番!!「家庭科男女共修ノ・ニ・ニ集会」△家庭科の男女共修をすすめる会▽		森川宅 083-246-3181
3日(日)	11:00—17:00	あこら山口・例会		すべーす・えいがさい
	12:00—	定期上映会「世界の女性監督シリーズ——(3回上映)700円		佐世保市立図書館
8日(金)	10:30—12:00	あこら佐世保・例会		日本女子会館5F(芝公園21618)
9日(土)	14:00—16:00	「子どもの訴え」——電話相談の窓から——安達優雅子		福岡市立婦人会館
13日(水)	14:30—	あこら九州・例会		喫茶「ミドリ」
16日(土)	14:00—	連続ミニ映画祭「建国記念の日」を撃つ——「戦争・子供たちの遺言」		神奈川高校教育会館ホール
17日(日)	14:00—17:00	女の映像制作講座△メディアアンナ▽		すべーす・えいがさい

85年第一回運営会議は3月21日(祭)東京で

風雲と波乱が予想される85年。依然として財政難に苦しむ「あごら丸」の前途も不透明ですが、昨夏の「小樽会議」以来、全国的な支援の声も次第に大きくなってきました。その一方、「活動家層」と「主婦層」で「あごら」に対する期待も二極分化してきています。船の舵をどの方向に進めるか、小樽会議を受けて、白熱の論議をたたかわせましょう。運営メンバーに立候補する方は、一月末日までに事務局にご連絡ください。

31号の編集作業を助けてくださる方

特集31号「私」との平等・差別」は発行が遅れておりますが、いま編集作業を進めています。雑用も山のようにありますので、編集の経験のない方でも、もしもお力を貸していただけるようでしたら、ご連絡ください。

「あごら」のアルバイト募集

「あごら」の事務は、従来、週一―二日の方二人と「BOC」の職員で分担していましたが、膨大な事務量のため過重労働となり、「BOC」の職員にも病人が続出しています。十時―四時(月―土)の勤務で結構ですから、毎日連続して働いていただける方を探しています。財政難のため、時給五百円、交通費実費支給という薄謝で申しわけなのですが、手伝える方、ハガキでご連絡くださいませんか。

おいしかった! 北の味

無公害食品で「あごら」のネットワークづくりを、と、小樽会議をさっそく受けて「札幌」が始動。93号でのあわただしい呼びかけでしたので、件数は思ったほどではなかった由ですが、利用者の間ではオイシイ! と大好評でした。一応「お歳暮企画」でしたが、好評に込め、年間計画も検討中です。

〔編集後記〕

国連婦人の十年最終年、女性差別撤廃条約批准の年、——ほとんどのお年賀状に書き添えられていたことばです。

でも、顔を合わせると、今イチ冴えない。

「均等法」は十分な審議もされないまま、各党政策レベルですでに話し合いがついたというウワサがまことしやかにささやかれ、去年までの燃えるような思いは寒風に凍えがちです。

児童手当の切り捨ては、さすがに撤回されるようですが、年金は、「一人の女としての権利」を全く顧みることなく、「世帯主の妻」としての保障にとどまりそう。しかも、この最も本質的な問題に、「革新」と言われる政党さえ、全くふれていないことが気にかかります。

「均等法対策集」が早くもまたに出回り始めました。出版社の商魂という以上に、「平等」を小手先のレベルでしか見ようとしないうねりを立てる大きな流れの前に自嘲の苦笑が浮かびがちですが、つぶやきましょう。

冬来たりなば 春遠からじ
(R)